

# 石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要28



— 大谷地区 —

2021年3月

島根県大田市教育委員会



# 石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要28



— 大谷地区 —

2021年3月

島根県大田市教育委員会



# 序

石見銀山遺跡は、16世紀から20世紀にかけての、採掘から製錬までが行われた鉱山跡と鉱山町、鉱山から港までを結ぶ2本の街道と周辺の山城跡、銀鉱石・銀が積み出され諸物資が搬入された港湾などからなる複合的な遺跡でございます。大田市教育委員会は島根県教育委員会と合同で、石見銀山遺跡の保存活用の推進と価値の顕在化のため、発掘調査・文献調査・石造物調査などの総合的な調査を、ユネスコ世界遺産に登録されてからも継続してまいりました。

本書は令和2年度に実施いたしました、大谷地区における発掘調査の概要報告でございます。大谷は「銀山六谷」の一つにも数えられる主要な谷で、現地には間歩をはじめ、岩盤を加工した平坦面、寺社跡などが残っています。現在では、石見銀山公園から公開坑道の一つである龍源寺間歩へと向かう主要な見学ルート沿いであり、遺跡の価値を多くの方にご覧いただく適地でもあります。

調査に際しましては、土地所有者の方々にご快諾いただきました。あわせて、文化庁、島根県教育委員会など、関係各機関のお力添えを賜りましたこと、衷心より厚く御礼申し上げます。

得られた調査成果は、将来に向けての保存・管理の資料とともに、これまで蓄積してまいりました調査研究成果と併せて公開・活用をはかることで、遺跡への関心や愛着の意識高揚へつながるよう、取り組んでまいる所存です。

令和3年3月

島根県大田市教育委員会

教育長 船木 三紀夫

# 例 言

1. 本書は、島根県大田市大森町に所在する史跡石見銀山遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は国庫補助事業として大田市教育委員会が事業主体となって実施した。
3. 本書は、令和2年度に大谷地区で実施した調査の概要をまとめたものである。
4. 調査体制は下記のとおりである。

## 〔石見銀山遺跡調査整備活用委員会〕

太田洋子(合同会社家の女たち代表)	大矢敬子(島根県国民保険団体連合会常務理事)
川口 純(DOWAホールディングス㈱執行役員)	黒田乃生(筑波大学大学院教授)
莉谷勇雅(大田市伝統的建造物群保存地区保存審議会委員)	
佐々木愛(島根大学法文学部教授)	田邊征夫((公財)元興寺文化財研究所所長)
津村眞輝子((公財)古代オリエント博物館研究部長)	内藤ユミイザベル(日本イコモス国内委員会理事)
仲野義文(石見銀山資料館館長)	中村哲郎(中村プレイス㈱専務)
松村恵司(奈良文化財研究所所長)	

## 〔事務局〕 大田市教育委員会教育部石見銀山課

〔調査員〕 山手貴生・新川 隆・尾村 勝(大田市教育委員会教育部石見銀山課)

〔遺物整理〕 高村玲子・井上伸子・淺野美貴

〔調査指導〕 文化庁記念物課、独立行政法人奈良文化財研究所、島根県教育委員会

5. 採図の縮尺は、図中に示した。
6. 採図中の座標は、世界測地系を使用した。また、レベル高は標高を示す。
7. Fig. 1は国土交通省国土地理院発行の地形図を縮小縮集し、一部加筆して使用した。
8. 本文中に使用した略号は下記のとおりである。  
SD—溝跡 SK—土坑 SP—柱穴 SW—石垣、石列 SX—特殊遺構、不明遺構 S—礎石
9. 採図中のマンセル表記及び土色は農林水産省技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』によった。
10. トレンチの記載については、採図中や表中、キャプションでは、○Tと略して表記している。
11. 発掘調査にあたっては、大橋泰夫氏より、ご指導・ご教授を賜った。
12. 本書の執筆は、山手が行った。本文中の採図は、遺構図については尾村が、遺物実測図については新川が中心になって作成した。写真については、遺構写真は各担当者が、遺物写真については山手が撮影した。編集は筆者協議の上、新川が行った。
13. 出土資料及び実測図・写真などは大田市教育委員会で保管している。

# 凡 例

## 1. 図版の表現

遺構・遺物図版中における表記は下記による。

これ以外のものについては個別に図中に示した。

### [遺構]



被熱土壤



岩盤



炉壁



黄色粘土



灰白色粘土



灰色土

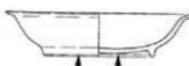


カラミ (精練滓)



黒色土 (炭層)

### [遺物]



煤



膜状付着物



炭化物



被熱部分

図中の▼印あるいは一点鎖線（図中↑箇所）は施釉範囲の境界を示す。

## 2. 本文中の語句

以下の語句については、カタカナ表記に統一し、その意味を定義しておく。

ズ リ・・・選鉱過程にて除去される化学的変化に起因しない目的外鉱物をいう

ユリカス・・・比重選鉱により除去された砂粒

カラミ・・・広義の製錬工程にて排出された鉱滓

# 本文目次

## 第1章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と概要.....	1
第2節 令和2(2020)年度の調査.....	2

## 第2章 大谷地区の調査

第1節 調査地の周辺環境.....	5
第2節 調査にかかる経緯.....	5
第3節 調査の概要.....	5
第4節 調査成果.....	6
第5節 出土遺物.....	25

## 第3章 総括

第1節 本年度の調査成果.....	41
第2節 岩盤加工遺構の展開.....	41
第3節 調査範囲南部の平坦面.....	42
第4節 課題.....	43

## 図 版

# 挿図目次

Fig. 1 石見銀山遺跡位置図 (S = 1 / 100,000) .....	1
Fig. 2 石見銀山遺跡調査地点位置図 (S = 1 / 20,000) .....	4
Fig. 3 大谷地区調査地点位置図 (S = 1 / 3,000) .....	6
Fig. 4 大谷地区第1地点トレンチ配置図 (S = 1 / 250) .....	7
Fig. 5 大谷地区第1地点遺構配置図 (S = 1 / 150) .....	9
Fig. 6 大谷地区第1地点1区平面図・土層断面図 (S = 1 / 50) .....	10
Fig. 7 大谷地区第1地点2区平面図・土層断面図 (S = 1 / 60) .....	11
Fig. 8 大谷地区第1地点2区SK01平面図・土層断面図 (S = 1 / 20) .....	12
Fig. 9 大谷地区第1地点2区SK02平面図・土層断面図 (S = 1 / 20) .....	13
Fig. 10 大谷地区第1地点3区平面図・土層断面図 (S = 1 / 50) .....	14
Fig. 11 大谷地区第1地点1T平面図・土層断面図 (S = 1 / 40) .....	16
Fig. 12 大谷地区第1地点SW02・SW03平面図・立面図 (S = 1 / 20) .....	18
Fig. 13 大谷地区第1地点SD01平面図・立面図 (S = 1 / 20) .....	19
Fig. 14 大谷地区第1地点3T平面図・土層断面図 (S = 1 / 40) .....	20
Fig. 15 大谷地区第1地点4T平面図・土層断面図 (S = 1 / 40) .....	22
Fig. 16 大谷地区第1地点5T平面図・土層断面図 (S = 1 / 40) .....	24
Fig. 17 大谷地区第1地点表採遺物実測図 (S = 1 / 3、1 / 6) .....	26
Fig. 18 大谷地区第1地点1区出土遺物実測図 (S = 1 / 2、1 / 3) .....	27
Fig. 19 大谷地区第1地点2区出土遺物実測図1 (S = 1 / 2、1 / 3、1 / 6) .....	28
Fig. 20 大谷地区第1地点2区出土遺物実測図2 (S = 1 / 3) .....	29
Fig. 21 大谷地区第1地点3区出土遺物実測図 (S = 1 / 2、1 / 3、1 / 4、1 / 6) .....	30
Fig. 22 大谷地区第1地点1T出土遺物実測図1 (S = 1 / 3) .....	31
Fig. 23 大谷地区第1地点1T出土遺物実測図2 (S = 1 / 2、1 / 3、1 / 4、1 / 6) .....	32
Fig. 24 大谷地区第1地点4T出土遺物実測図 (S = 1 / 2、1 / 3) .....	33
Fig. 25 大谷地区第1地点5T出土遺物実測図1 (S = 1 / 3、1 / 6) .....	34
Fig. 26 大谷地区第1地点5T出土遺物実測図2 (S = 1 / 3、1 / 4) .....	35

# 表目次

Tab. 1 石見銀山遺跡調査一覧 .....	3
Tab. 2 大谷地区検出柱穴一覧表 .....	17
Tab. 3 大谷地区出土遺物一覧表I .....	37
Tab. 4 大谷地区出土遺物一覧表II .....	38
Tab. 5 大谷地区出土遺物一覧表III .....	39
Tab. 6 大谷地区出土遺物一覧表IV .....	40

# 図版目次

P L .01	大谷地区 調査前状況（東より）	同 調査区設定状況（西より）	同 3区SWO 1（南東より）
P L .02	大谷地区 1区全景（南西より）	同 1区全景（西より）	同 3区SWO 1（南西より）
P L .03	大谷地区 1区東側（北東より）	同 1区西側（北東より）	同 3区SK0 4（西より）
P L .04	大谷地区 1区西側（西より）	同 1区東端（東より）	同 3区SK0 4（北より）
P L .05	大谷地区 1区SK0 6（南より）	同 1区東端硬化面（西より）	同 3区SK0 5（南より）
P L .06	大谷地区 1区SX6 8（東より）	同 1区東端硬化面（南より）	同 3区SK0 5（西より）
P L .07	大谷地区 2区西半壁加工造構（南より）	同 1区西側土層断面（西より）	P L .12 大谷地区 3区SK0 6（南東より）
P L .08	大谷地区 2区SX6 8（東より）	同 1区東側土層断面（西より）	同 3区SK0 6（南より）
P L .09	大谷地区 2区SK0 2裏込め土層断面（東より）	同 1区東側土層断面（東より）	同 3区調査風景（西より）
P L .10	大谷地区 1区SWO 2上面（北より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（西より）	同 3区SD0 6（西より）
P L .11	大谷地区 1区SWO 2上面（西より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	同 3区SD0 5西側（東より）
P L .12	大谷地区 1区SX6 8（東より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	同 3区SD0 5中央部（南より）
P L .13	大谷地区 1区SX6 8（東より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（西より）	同 3区SD0 5中央部（南西より）
P L .14	大谷地区 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（西より）	P L .13 大谷地区 1 T全景（北西より）
P L .15	大谷地区 1区SWO 2裏込め土層断面（西より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	同 1 T第1面（北西より）
P L .16	大谷地区 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（西より）	同 1 T第2面（北西より）
P L .17	大谷地区 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	P L .14 大谷地区 1 TSD0 1完掘（南西より）
P L .18	大谷地区 1区SWO 2裏込め土層断面（西より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（西より）	同 1 TSD0 1完掘状況（南西より）
P L .19	大谷地区 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	同 1 TSD0 1北壁石組（北西より）
P L .20	大谷地区 1区SWO 2裏込め土層断面（西より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（西より）	同 1 TSD0 1南壁石組（北西より）
P L .21	大谷地区 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	同 1 TSD0 1土層断面（西より）
P L .22	大谷地区 1区SWO 2裏込め土層断面（西より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（西より）	同 1 TSD0 1土層断面（東より）
P L .23	大谷地区 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	P L .15 大谷地区 1 T土層断面（北西より）
P L .24	大谷地区 1区SWO 2裏込め土層断面（西より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（西より）	同 1 T北端土層断面（南西より）
P L .25	大谷地区 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	同 1 T北端土層断面（東より）
P L .26	大谷地区 1区SWO 2裏込め土層断面（西より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（西より）	同 1 T南端土層断面（西より）
P L .27	大谷地区 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	同 1区SWO 2裏込め土層断面（東より）	P L .16 大谷地区 1 T北側（南より）
			同 1 T北側（西より）
			P L .17 大谷地区 1 T南側（北より）
			同 1 T南側（東より）
			P L .18 大谷地区 1 TSWO 2（南より）
			同 1 T北側土層断面（北東より）
			同 1 T北端土層断面（東より）
			P L .19 大谷地区 1 T南側土層断面（東より）
			同 1 T南側土層断面（東より）
			P L .20 大谷地区 1 T北側土層断面（東より）
			同 1 T北側土層断面（東より）
			P L .21 大谷地区 1 T南側土層断面（東より）
			同 1 T南側土層断面（東より）
			P L .22 大谷地区 1 T北側土層断面（東より）
			同 1 T北側土層断面（東より）
			P L .23 大谷地区 1 T南側土層断面（東より）
			同 1 T南側土層断面（東より）
			P L .24 大谷地区 1 T北側土層断面（東より）
			同 1 T北側土層断面（東より）
			P L .25 大谷地区 1 T南側土層断面（東より）
			同 1 T南側土層断面（東より）
			P L .26 大谷地区 1 T北側土層断面（東より）
			同 1 T北側土層断面（東より）
			P L .27 大谷地区 1 T南側土層断面（東より）

# 第1章 遺跡の概要

## 第1節 遺跡の位置と概要

### 第1項 石見銀山遺跡の位置と概要 (Fig. 1)

石見銀山遺跡は、島根県中央部の大田市に位置する鉱山遺跡である。遺跡の中心部は、日本海から直線距離で約6kmの内陸部に位置する。遺跡の周辺には、大江高山火山群の一角である仙ノ山や、要害山などの海拔400～500m級の山々が連なり、山間に深い谷と水系が発達している。山地から海岸に至るまで平地は極めて少なく、銀を運んだ

街道は中小の丘陵や台地、谷間の水系の間を縫つて設けられている。港と港町が位置する沿岸部にはリアス式海岸が展開し、港の奥部には狭い谷が発達している。

本遺跡は、16世紀から20世紀にかけて鉱業活動が行われた鉱山跡と鉱山町を中心に、周囲の山城跡や銀鉱山から港までを結ぶ2本の街道、銀鉱石・銀の積出しや銀山で必要な諸物資を搬入した港湾などからなる複合遺跡である。銀の生産から

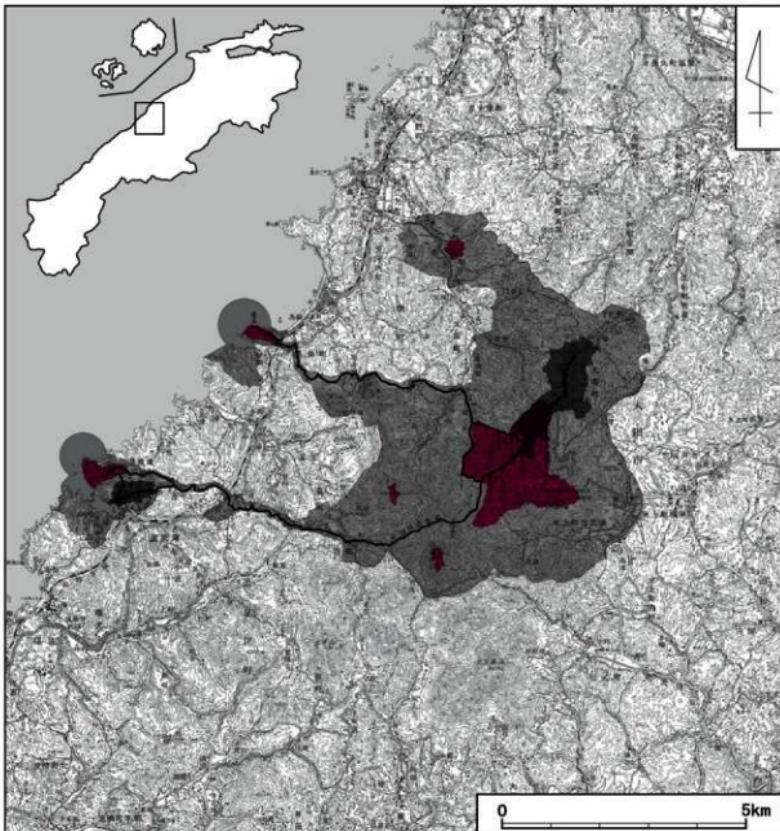


Fig. 1 石見銀山遺跡位置図 ( $S = 1 / 100,000$ )

搬出に至る鉱山開発の社会機構及び社会基盤施設の総体を示すこれらの良好な遺跡群は、鉱山町や港湾などの建造物群とともに、当時の土地利用の在り方と機能の一部が現在にも伝達されつつ、自然と共生した顕著な普遍的価値を持つ文化的景観の事例として、平成 19(2007) 年にユネスコ世界遺産に登録された。

## 第2項 調査の経過 (Tab. 1)

石見銀山遺跡の発掘調査は、大田市教育委員会が昭和 58(1983) 年度から開始した。昭和 60(1985) 年度には島根県教育委員会によって「石見銀山遺跡関連遺跡分布調査報告書」が刊行されて、石見銀山遺跡とその周辺の銀山関連遺跡の分布が明らかとなった。昭和 61(1986) 年度には、県教委によって「石見銀山遺跡総合整備計画策定報告書」が刊行され、撲点箇所での発掘調査を継続することが、石見銀山の歴史と遺跡を明らかしていく上で重要であるという指針が示された。その指針に基づいて、昭和 63(1988) 年からは県教委と市教委が共同で、平成 18(2006) 年からは市教委が主体となって毎年継続して発掘調査を実施している。

平成 8(1996) 年度からは石見銀山遺跡総合調査が開始した。平成 14(2002) 年度にはその成果として、石見銀山遺跡の広域的な保存を目的とした史跡範囲の追加指定が行なわれた。その後、調査の進展と共にさらに史跡範囲の拡大と保護措置が図られ、平成 20(2008) 年には、史跡指定総面積は 389ha となった。これまでの調査地点と調査の経過は Tab. 1 のとおりである。

石見銀山遺跡では、平成 8(1996) 年度に組織された発掘調査委員会で「採鉱と製錬の技術体系の解明を調査の柱とし、400 年に及ぶ鉱山都市の実態を明らかとする」ことを目的として発掘調査が立案され、同委員会の指導の下で実行されてきた。発掘調査委員会はその後、調査・整備の進展に伴って平成 14(2002) 年には「石見銀山遺跡調査整備委員会」、平成 20(2008) 年には「石見銀山遺跡調査活用委員会」と改組された。平成 26(2014) 年度には石見銀山の調査・整備の全般を統括する「石見

銀山遺跡調査整備活用委員会」と、考古学・文献史学・自然科学などの専門家を主体とする調査の専門部会である「石見銀山遺跡調査専門委員会」となり、それぞれの指導の下で発掘調査を実施した。さらに、令和 2(2020) 年度からは「石見銀山遺跡調査整備活用委員会」に一本化された。

## 第2節 令和 2(2020) 年度の調査

### 第1項 調査にいたる経緯

令和 2(2020) 年度は、大谷地区の発掘調査を実施した。本地区的発掘調査は、中長期計画においては石見銀山の谷部における調査として位置づけられており、仙ノ山地区的発掘調査完了後に実施することとしていた。令和元(2019) 年 11 月 12 日に開催された第 6 回石見銀山遺跡調査整備活用委員会にて本地区的調査が承認され、着手することとなった。なお、大谷地区的発掘調査は、本年度から令和 4 年度までの 3か年で計画している。

発掘調査は、現地確認と周囲の環境整備を実施したのちに、島根大学の大橋泰夫教授より現地指導を受けて計画し、令和 2(2020) 年 7 月 17 日付で現状変更許可を受けて着手した。

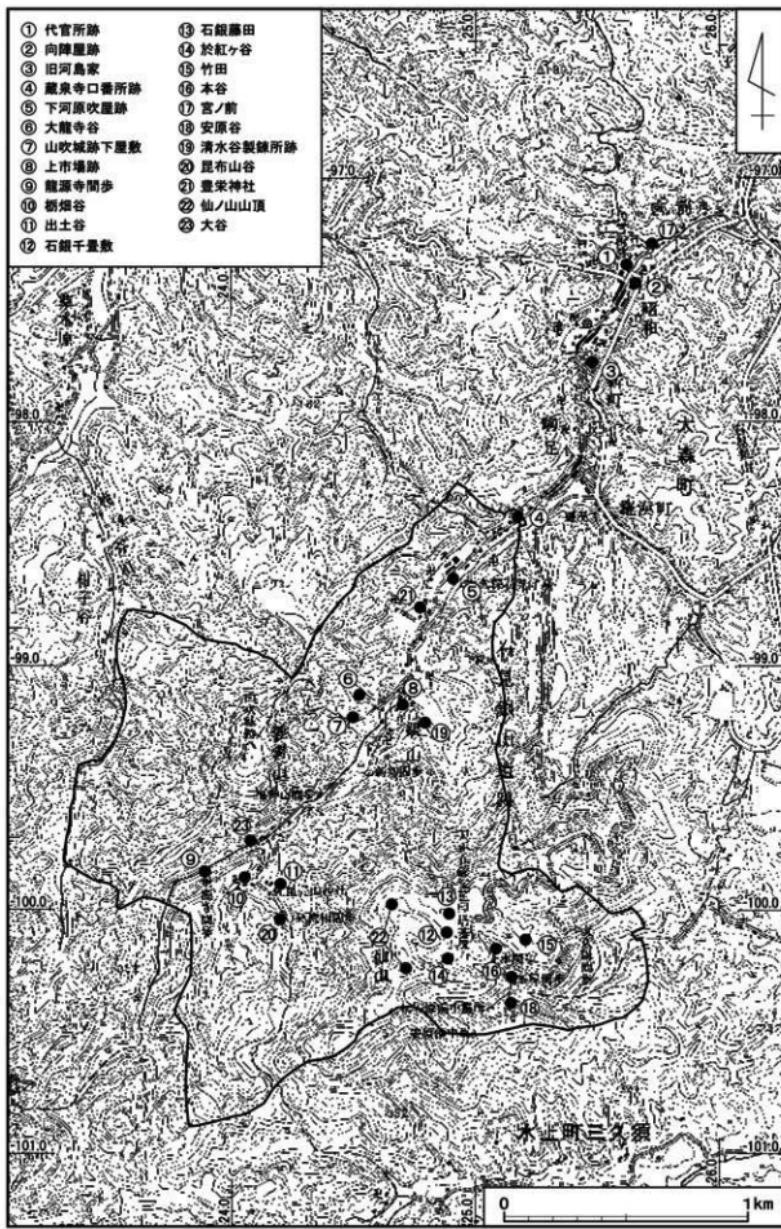
### 第2項 指導関係及び公開事業

発掘調査方針及び成果の検証に加えて、令和 3 年度以降の発掘調査計画について、令和 2(2020) 年 5 月 21 日と 12 月 24 日に大橋泰夫氏（島根大学教授）から指導を受けた。

公開事業としては、令和 2(2020) 年 12 月 19 日に、発掘調査地にて現地見学会を開催し、多くの見学者の来場があった。

Tab. 1 石見銀山遺跡調査一覧

年 度	西 历	調 査	調 査 地 点	備 考
昭和 58 年	1983	発掘調査	①代官所跡、④藏泉寺口番所跡	石見銀山遺跡総合整備計画の策定
60 年	1985	分布調査	大田市、温泉津町、仁原町、邑智町、赤来町、大和村、羽須美村に所在する石見銀山関連遺跡	
63 年	1988	発掘調査	⑤龍源寺跡	
平成元年	1989	発掘調査	藏泉寺口番所跡、②向陣屋跡、⑥上市場	
2 年	1990	発掘調査	藏泉寺口番所跡、⑥大龍寺谷、③旧河島家	
3 年	1991	発掘調査	⑤下河原歌屋跡	
4 年	1992	発掘調査	⑦山吹城跡下屋敷	
5 年	1993	発掘調査	⑩石銀千貫敷	
6 年	1994	発掘調査	石銀千貫敷	
7 年	1995	発掘調査	石銀千貫敷	
8 年	1996	発掘調査	⑪石銀疊田	総合調査開始
9 年	1997	発掘調査	⑫宮ノ前、⑬出土谷、石銀疊田	
10 年	1998	発掘調査	⑭柳畠谷、石銀疊田、⑮於紅ヶ谷、⑯竹田	
11 年	1999	発掘調査	宮ノ前、石銀疊田、出土谷、竹田	
12 年	2000	発掘調査	宮ノ前、石銀疊田、出土谷、竹田	
		分布調査	柑子谷	
13 年	2001	発掘調査	宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、⑯本谷、町並み保存地区(阿部家、熊谷家)	
14 年	2002	発掘調査	宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、本谷、町並み保存地区(阿部家、熊谷家)	
15 年	2003	発掘調査	宮ノ前、下河原下組、出土谷、本谷	
16 年	2004	発掘調査	宮ノ前、本谷、港湾集落、町並み保存地区	
17 年	2005	発掘調査	本谷、町並み保存地区(國家)	
18 年	2006	発掘調査	本谷、町並み保存地区(宗國家)	
19 年	2007	発掘調査	⑯安原谷、下河原、町並み保存地区(渡辺家)	世界遺産登録
20 年	2008	発掘調査	安原谷、町並み保存地区(柳原家、渡辺家)、⑯清水谷製鍊所跡	
21 年	2009	発掘調査	安原谷、本谷、町並み保存地区(杉谷家、渡辺家)、清水谷製鍊所跡	
22 年	2010	発掘調査	安原谷、本谷、⑯昆布山谷、港湾集落	
23 年	2011	発掘調査	昆布山谷、石銀、町並み保存地区(旧大住家)、港湾集落	
24 年	2012	発掘調査	昆布山谷、港湾集落	
25 年	2013	発掘調査	昆布山谷	
26 年	2014	発掘調査	昆布山谷、町並み保存地区(宗國家)	
27 年	2015	発掘調査	昆布山谷、町並み保存地区(宗國家)、⑯豊栄神社	
28 年	2016	発掘調査	昆布山谷、町並み保存地区(宗國家、金森家)	
29 年	2017	発掘調査	昆布山谷、町並み保存地区(金森家)、豊栄神社	
30 年	2018	発掘調査	⑯仙ノ山、町並み保存地区(金森家)、佐昆光山神社	
令和元年	2019	発掘調査	仙ノ山、町並み保存地区(金森家)	
令和2年	2020	発掘調査	⑯大谷	



## 第2章 大谷地区的調査

### 第1節 調査地の周辺環境 (Fig. 2・3)

大谷は、石見銀山の中でも主要な谷である銀山六谷（大谷、本谷石銀、柄畠谷、昆布山谷、休谷、下河原）の一つにも数えられる谷である。銀山地区の、藏泉寺口から坂根口まで通じる主要道の西部に位置し、大森町と銀山町の境である藏泉寺口から、下河原、休谷、御崎谷を抜けると大谷に至る。この道は、現在では石見銀山公園から龍源寺間歩へと向かう主要な見学道となっており、石見銀山の中で最も見学者が多い地域となっている。

大谷の東部には、国の史跡にも指定されている高橋家があり、高橋家の南からは柄畠谷・昆布山谷へと続いている。高橋家から西に進むと公開坑道の一つである「龍源寺間歩」があり、そこからさらに西に行くと坂根口番所跡に至る。

寛政元年頃に描かれた「石見銀山施設図」の、大谷にあたる範囲には、「御銀吹所」と記された建物があり、江戸時代後半には大谷周辺で銀生産が行われていたことが想定できる。この絵図には銀山区域の主要な施設が描かれており、大谷の範囲には、御銀吹所のほかに神宮寺や西善寺などがある。

また、大谷の東部で御崎谷・柄畠谷と接する箇所は、明治時代に藤田組による金属生産が行われていた記録が残っている。この中でも、高橋家前の銀山川右岸付近には、製錬所があったという記録もある。

### 第2節 調査にかかる経緯

第1節でも述べたように、大谷地区は、石見銀山の中でも主要な谷の一つとして、採掘・製錬が行われていた場所である。また、現在においても主要な観光道の一部として機能しており、将来的に調査成果を整備・活用へとつなげていくことを考えた場合には、非常に適した地区と判断された。

今年度の調査地点は銀山川の左岸で、現在の道路北側にあたる平坦地の、第1地点である。第1地点は、道路沿いで立地条件がよかつたことに加えて、

背後の岩盤には露頭掘りの痕跡や、ひ追いによる間歩(466号間歩)と、坑道掘りによる間歩(465号間歩)が所在していた。採掘方法の異なる痕跡や間歩が所在していることから、当地では長期間にわたって採掘が行われていたと考えられた。また、調査地北部に広がる岩盤には、加工痕が顕著に観察されることから、複数の時期にわたって加工された岩盤加工遺構の検出が期待された。

以上のような現地の状況に加えて、先述の「石見銀山施設図」には、調査地付近に「御銀吹所」と記された建物が描かれていることから、江戸時代中後期の吹屋遺構の検出が期待されたことも選定理由の一つである。

### 第3節 調査の概要 (Fig. 3~5)

本年度の発掘調査範囲である第1地点については、調査区の北側に展開する岩盤周囲とその直下にある平坦面の、東西約35m、南北約15mの範囲を、遺構のまとまりを元に、東から1区・2区・3区とした。さらに、それぞれの区の南側に広がる平坦地には、岩盤に直行する方向に幅2mのトレチを計4本設定した。なお、トレチ名は1トレチ、3トレチ、4トレチ、5トレチとしている。当初は、2トレチを含めて計5本のトレチを設定する計画であったが、環境整備後の現地の状況を鑑みて整理し、2トレチを欠番とした。

1区は、第1地点の岩盤の中でも最も東部に位置する区画で、調査範囲東端部にある465号間歩から約8.8m西までである。1区の岩盤で、壁面をコの字状に加工している遺構がSX 03である。SX 03には、平坦面(SX 09~18)や溝跡(SD 02)などが加工されている。岩盤の直上付近で近代の肥前磁器(18)が出土したことから、近代までは岩盤が地表面に露出していたと判断できる。1区南部には、4トレチを設定した。

2区は1区との境から約13.2m西側までである。1区と同じく、岩盤の全体を加工しているが、東半

の岩盤加工のまどまりをSX 01とした。SX 01には、平坦面(SX 19～21)の他、掘込(SK 01)などの遺構がある。西半も大きく加工されており、複数の平坦面(SX 30～33・49～51)がある。さらに、その平坦面には溝跡(SD 03等)や柱穴、掘込(SK 02等)が加工されている。2区の南部には、1トレンチを設定した。

3区は2区との境から約9.2m西側まで、1・2区よりもさらに大きな岩盤加工遺構が所在する区画である。この3区の岩盤加工遺構はSX 02として整理しており、SX 02には掘込(SX 63～67)、石列(SW 01)などがある。本調査区の南部には、3トレンチを設定した。

また、調査範囲西端部に、5トレンチを設定した。

#### 第4節 調査成果

##### 第1項 1区(Fig. 6)

1区は、第1地点の北部に広がる岩盤加工遺構群の東部に相当する。岩盤は中央部が大きく崩れており、一部の遺構は欠失している。岩盤には多くの遺構が加工されているが、平坦面が複数みられるこことや、岩盤が崩れた前と後に構築された遺構もそれぞれ認められることから、一度に構築されたのではなく、本地区の利用が始まってから段階的に加工されていったと判断できる。以下では、1区で検出された個別の遺構を報告する。

##### 【溝跡】SD 02

SD 02は1区北側の岩盤斜面を、西から東に向かって走る溝である。中央部が岩盤の崩落によって

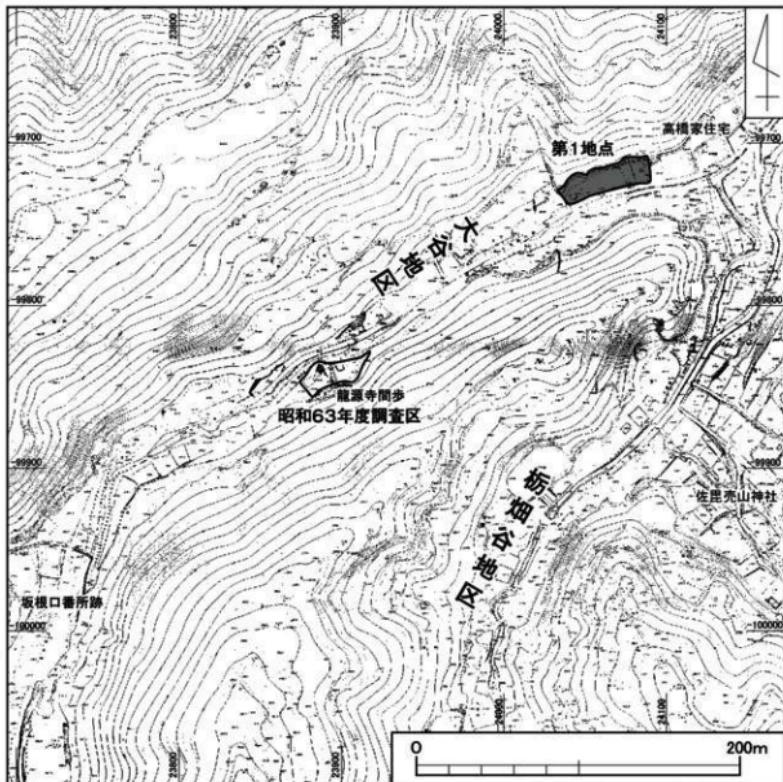


Fig. 3 大谷地区調査地点位置図 ( $S = 1 / 3,000$ )

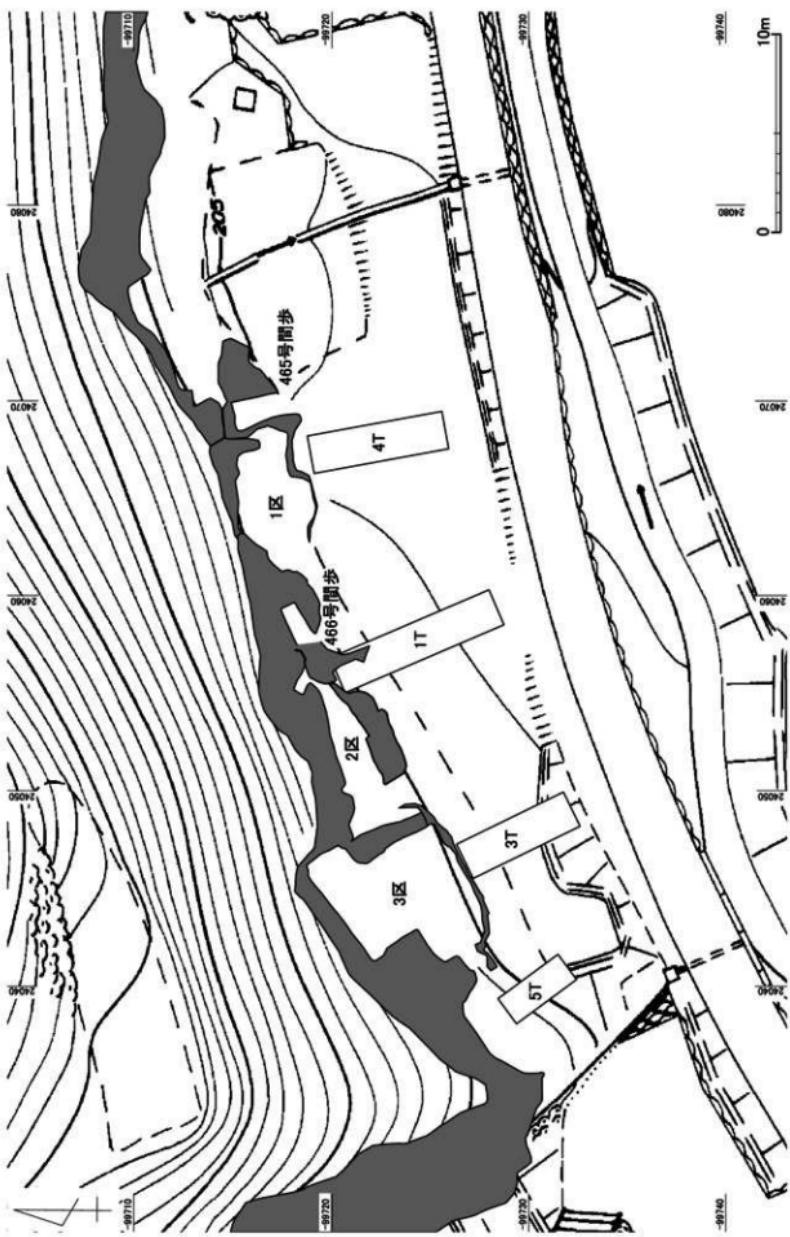


Fig. 4 大谷地区第1地点トレンチ配置図 ( $S = 1 / 250$ )

欠損しているが、基本的には本地区の北側斜面から流れてくる雨水等の流入を防ぎ、東側へと流す構造になっている。全長は約 8.6 mで、西部は幅が上端 22~25 cm、下端 18 cm、深さ 10~12 cm、東部は上端 14~16 cm、下端 10 cm、深さ 4~8 cmである。

SD 02 西半部北壁の、底面から 15~20 cm 上には、径 10~16 cm の穴が 5つ、25~28 cm 間隔で残っている。この穴は上部の壁がやや上向きに加工されており、棒状のものを斜め上から差し込めるようになっていることから、岩盤の上に屋根をかけるための垂木穴と考えられる。SD 02 中央にある崩落部の西端にも穴の痕跡が残っていることから、本来はもっと多くの穴が掘り込まれていたと考えられるが、全体の規模は分からなくなっている。

#### 【平坦面】 SX 09 ~ 13

岩盤を L 字型に掘り込み、その前面を平坦に加工した遺構である。内部には付随する遺構が確認されなかったため、用途は不明である。ただし、それぞれの平坦面には標高差があることや、SX 10・11 は崩落後に加工されていることから、同時期の遺構ではなく、時期差をもって段階的に加工されたとみられる。

#### 【掘込】 SX 05 ~ 08

岩盤を垂直に掘り込んだ矩形の掘込で、岩盤の壁面に柱を立てるための遺構とみられ、簡易的な小屋掛け等がされていたことが窺われる。それぞれの大きさは、SX 05 が幅 26 cm・高さ 30 cm・奥行 14 cm、SX 06 が幅 30~50 cm・高さ 60 cm・奥行 20 cm、SX 07 が幅 25 cm・高さ 60 cm・奥行 20 cm、SX 08 が幅 25 cm・高さ 15 cm・奥行 20 cm である。SX 05~07 は、各遺構の間が 110 cm 程度で揃っていること、奥壁が直線的に並ぶこと等から、一連の遺構とみられる。また、SX 07 は SX 08 によって切り込まれており、両者には前後関係が存在し、複数回にわたって加工されたことが確認されている。

#### 【不明遺構】 SX 68

SX 68 は、SX 03 東端の硬化面上に、東西約 70 cm、南北約 10 cm の範囲を長方形に掘り込んだ遺構である。上面に板状の木片があったため完掘はしていないが、内部は空洞になっていた。

#### 第2項 2区 (Fig. 7)

2区は岩盤加工遺構の中央部である。1区と同じく岩盤に多くの遺構が加工されているが、本区においては中央に位置する 466 号間歩を基準として、東半の SX 01 周辺と西半に大きく分けることができる。また、466 号間歩の南には、東西のいずれにも分類しにくい遺構の一群があるため、それらは個別に記述する。なお、466 号間歩は幅約 45 cm の、ひ追い掘り坑道である。

2区と3区の境とした帯状の岩盤の高まりには、SP 01・02・07~12、SX 47~51 などがあるが、SX 30 上の柱穴と一連とみられる SP 01・02 以外は、2・3区のいずれに属するのかは判断が難しい。

#### (1) SX 01

SX 01 は、岩盤をコの字型に加工した遺構である。SX 01 の中には平坦面や溝跡・穴状遺構などが加工されている。以下では、SX 01 に付随する遺構について、個別に報告する。

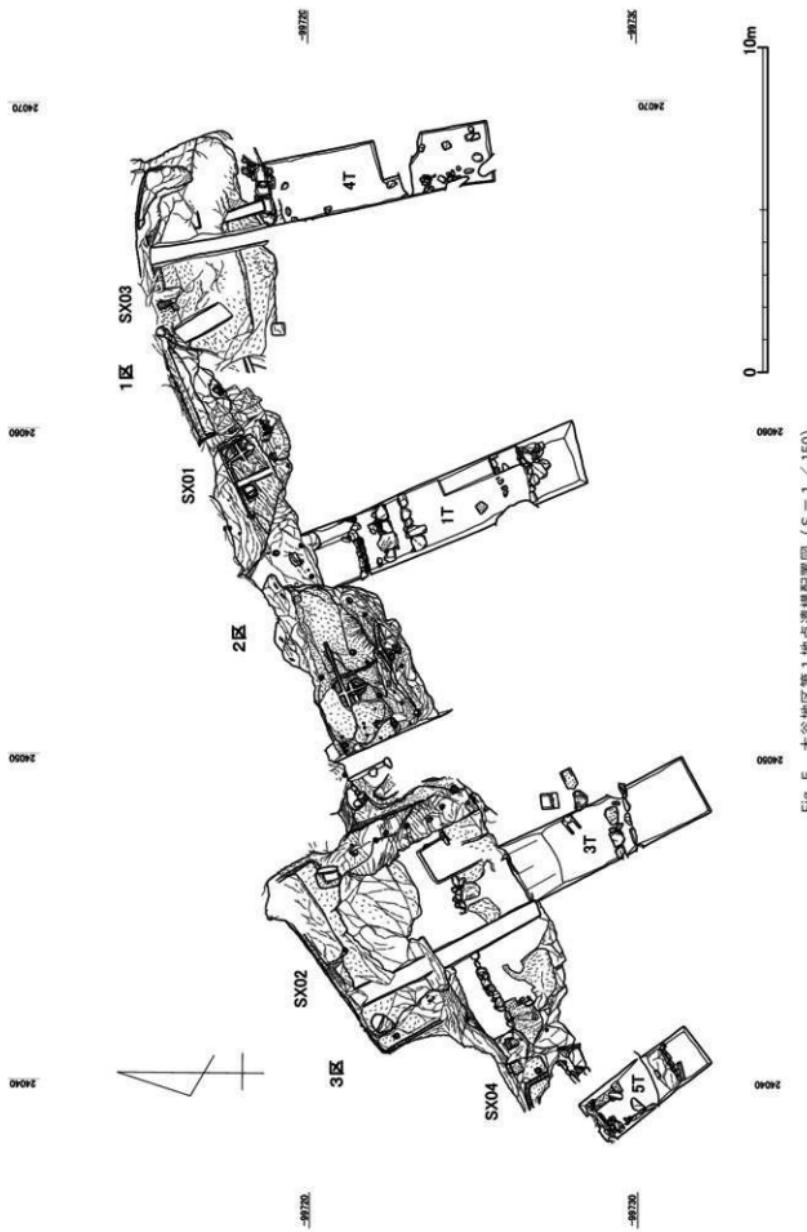
#### 【平坦面】 SX 19

SX 19 は東西幅 2.35 m の平坦面で、内部には SK 01、SK 09 がある。南に向かって緩やかに傾斜しており、後世に改変されている可能性もある。北壁と東壁沿いには SD 06 が加工されており、SX 19 に岩盤からの雨水が流れ込まないようになっている。

SX 19 の北西隅には径 8~10 cm、深さ約 3 cm の浅い掘り込みがある。この掘り込みは SX 19 に伴う可能性があり、柱を立てていた痕跡とみることもできる。

#### 【溝跡】 SD 06

SD 06 は、SX 19 の北壁・東壁に加工された溝で、岩盤からの雨水・流水が、平坦面に流れ込まないために設けられた遺構とみられる。規模は、幅が上端 12~15 cm、下端 9~11 cm、深さ 4~6 cm である。東から西に向かって傾斜しており、SK 09 の北側を回ってから、下方へと流れようになっている。現状では北東部が SK 01 とつながっており、北東方向からの水はまず SK 01 へと流れ込むようになっている。ただし、SD 06 に流入した水



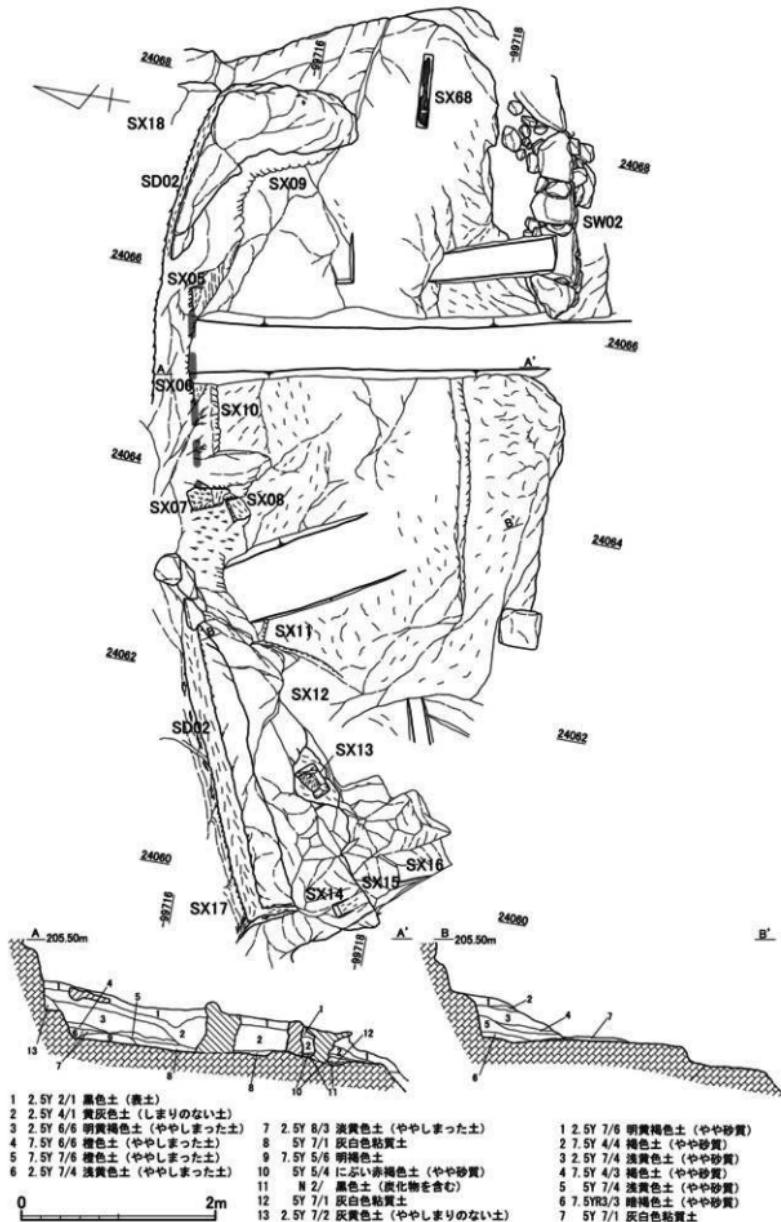


Fig. 6 大谷地区第1地点1区平面図・土層断面図 (S = 1 / 50)



Fig. 7 大谷地区第1地点2区平面図・土層断面図 (S = 1 / 60)

は西側に排水されるためSK 01には流れ込まない。さらに、SK 01からオーバーフローした排水はSD 06を流れない構造となっている。そのため、当初から関連付けて加工されていた可能性は低く、SD 06がSK 01に先行する可能性がある。

#### 【穴状遺構】 SK 01・SK 09(Fig. 8)

SK 01は、SX 19の東端部に位置する。SX 19加工面から、すり鉢状に掘り下げた遺構である。平面形は、長径約90cm、短径約50cmの楕円で、深さは約30cmである。用途は不明だが、東側の壁面に幅7cm、縦15cm、深さ3cmの長方形の掘り込みがあり、何かの部材をはめ込んでいた痕跡と考えられる。埋土は粘質土で、埋土内からは肥前陶器の壺(61)が出土している。北側と東側の岩盤をつたって水を引き入れる構造になっていることから、

水を必要とする選鉱作業などに使われていた可能性がある。遺構に伴う排水設備は確認されておらず、適宜くみ取るか、南部からオーバーフローさせていたと考えられる。

SK 09は、SX 19中央部の北壁沿いに位置する。規模は、長径44cm、短径34cmで、平面形は長方形である。底面がまっすぐではなく、深さが北側で18cm、南側が10cmと、底面は北に向かって下がっている。比較的浅い遺構で用途は不明であるが、埋土に鉄分が析出した橙褐色の層があり、選鉱作業などに使われていた可能性もある。

#### 【掘込】 SX 22～24

SX 22～24は岩盤に対して垂直に掘り込まれた矩形の遺構で、1区のSX 05～08と同様のものである。SX 22はSX 19の上方にあり、幅14cm、

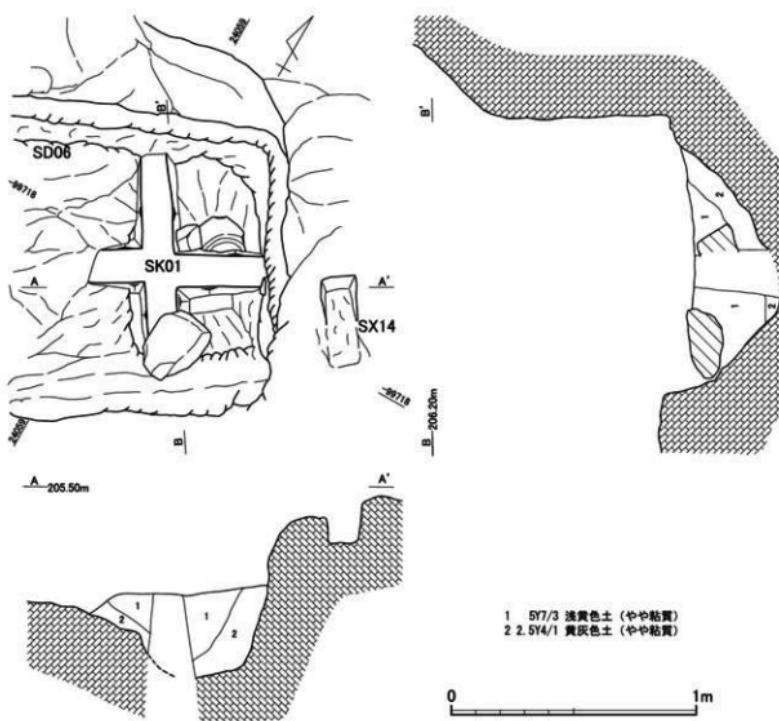


Fig. 8 大谷地区第1地点2区SK 01平面図・土層断面図 (S = 1 / 20)

高さ14cm、奥行10cmである。また、SX 22とSD 06の間の岩盤には、径5cm程度の穴が3か所開いている。建物などの部材を差し込む掘込とも考えられるが、周囲に同様のものはない。屋根などをかけるための部材であれば単独で機能するとは想定にくいため、岩盤の崩落などによって失われてしまつた可能性がある。

SX 23・24はSX 19の下方にある。規模はSX 23が南端幅9cm、北端幅5cm、高さ30cm、南北

20cmで、SX 24が南端幅33cm、北端幅13cm、高さ33cm、南北10cmである。SX 23は、他の掘込と比べて薄く加工しており、柱よりも板状のものをはめ込んでいたのではないかとみられる。SX 24の奥壁には一辺が7cmの掘り込みがあることに加え、向かって左端には細い溝を設けているなど、他の掘込とは異なる特徴がある。

#### 【不明遺構】 SX 25

SX 25は、2区東端部に加工された溝状の掘込

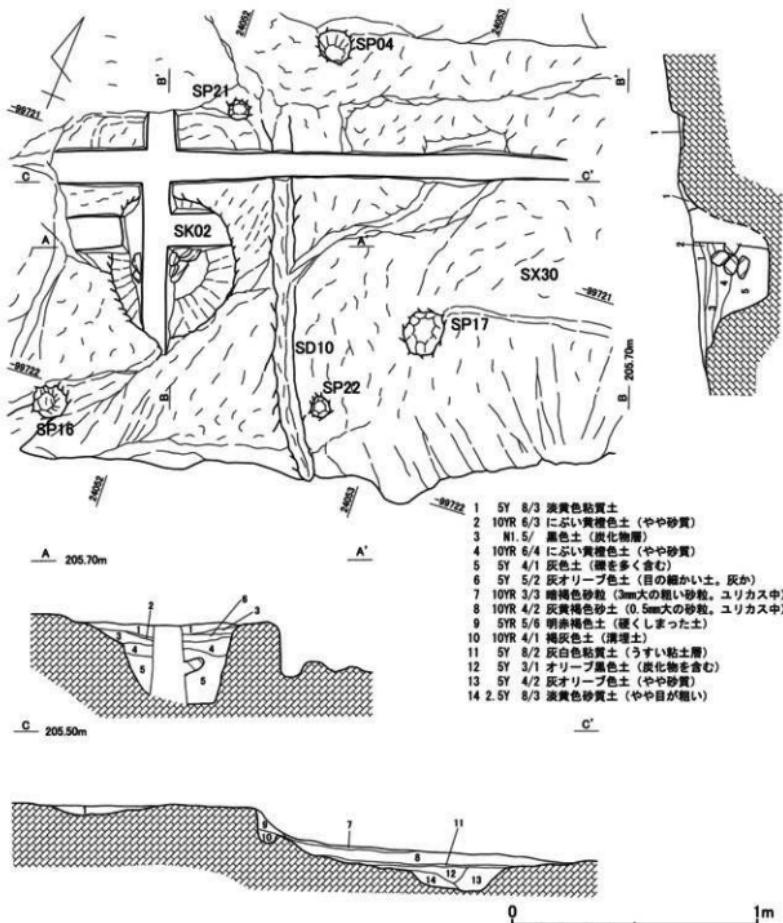


Fig. 9 大谷地区第1地点2区SK02平面図・土層断面図 (S = 1 / 20)

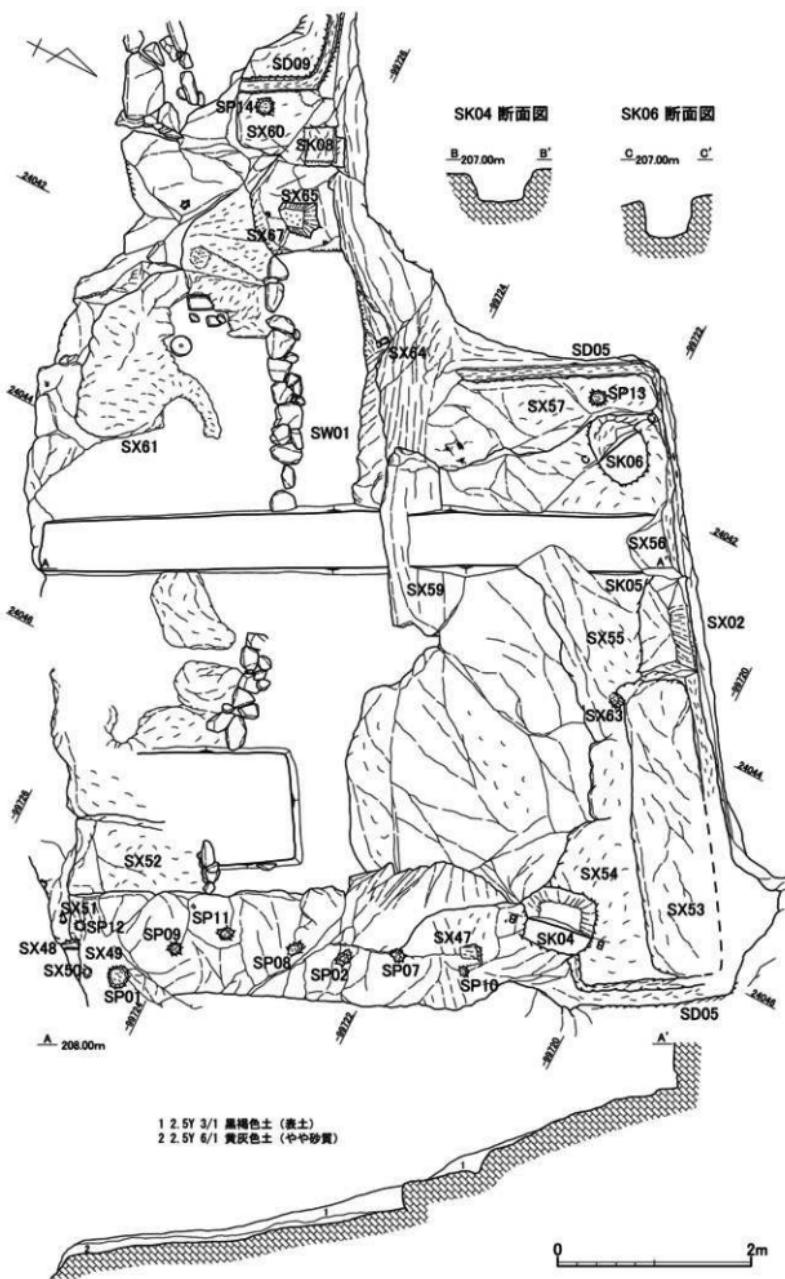


Fig.10 大谷地区第1地点3区平面図・土層断面図 ( $S = 1 / 50$ )

である。残存状況では、L字型の平面形を呈している。規模は、幅が上端9~15cm、下端3~7cmで、深さが最大で18cmである。上部の岩盤が一部に残っており、岩盤を貫通した孔状になっている箇所がある。ここに縄などを通すための構造とも考えられるが、実際の機能・用途は不明である。

これらの遺構以外に、SX 01には伴わないが、SX 19に先行する平坦面として、SX 20・21が検出されており、この区画も複数回の加工がされていることが窺われる。

## (2) 2区中央付近

2区のほぼ中央には466号間歩があり、その南側には掘込や柱穴、平坦面が加工されていた。

SK 07は、規模が長辺44cm、短辺30cmで、平面形が長方形の掘り込みである。

SP 19・20は柱穴とみられ、SP 19は466号間歩の手前に掘り込まれており、直径16cm、深さ15cmの円形である。SP 20は、SP 19の南側に位置し、長辺15cm、短辺13cm、深さ5cmの楕円形である。SP 19・20の周囲には対応する柱穴は確認できない。加工当初には存在していた可能性があるが、後世の崩落や再加工などにより消失したことも考えられる。

SX 27~29は、SK 07の南側に位置する遺構で、径8~13cm、深さ3cmの浅い掘り込みである。

## (3) 2区西半(Fig. 7・9・10)

2区の中でも466号間歩から西の範囲である。北側の岩盤には露頭掘りの痕跡もあり、本地点で古くから採掘活動が行われていたことが窺われる。

### 【平坦面】 SX 30 ~ 33・49 ~ 51

SX 30は、東西約7.6m、南北約2mの平坦面で、内部にはSK 02、SD 03・10をはじめ、柱穴や掘込など、多くの遺構がある。北東隅には一辺が24cm、深さ1cmの浅い掘込(SX 46)があり、柱のあて痕の可能性がある。SP 02~04からさらに続く柱が立っていた可能性もある。詳細は後述するが、SX 30中央部にはSD 10が加工されている。SD 10の上端は東西で高さが異なり、段差になっている

ことから、SX 30を区画していた溝の可能性もある。

SX 31は、SX 30よりも古い平坦面と考えられる。SX 30の北側に一部が残存しており、SX 30が加工された際に壊されたと推定される。

SX 32・33は、SX 30南側の岩盤斜面に一部が残存している。

SX 49~51は、2区・3区境にある帶状の岩盤の高まりに加工された平坦面である。本報告では個別の遺構として扱っているが、一連の階段状遺構である可能性も残っている。

### 【柱穴】 SP 01 ~ 18・21・22

SP 01~18・21・22は、2区西半の平坦面及び岩盤斜面に掘り込まれた柱穴である。それぞれの平面形と規模は、Tab. 2に示したとおりである。

これらの内、SP 01~06は直線的に並んでおり、一連の遺構となる可能性がある。

SP 03には、東西に一辺が7~8cm、深さ3cmで、平面が正方形の小さな掘り込みが2つあるほか、南北には浅い溝が掘り込まれている。

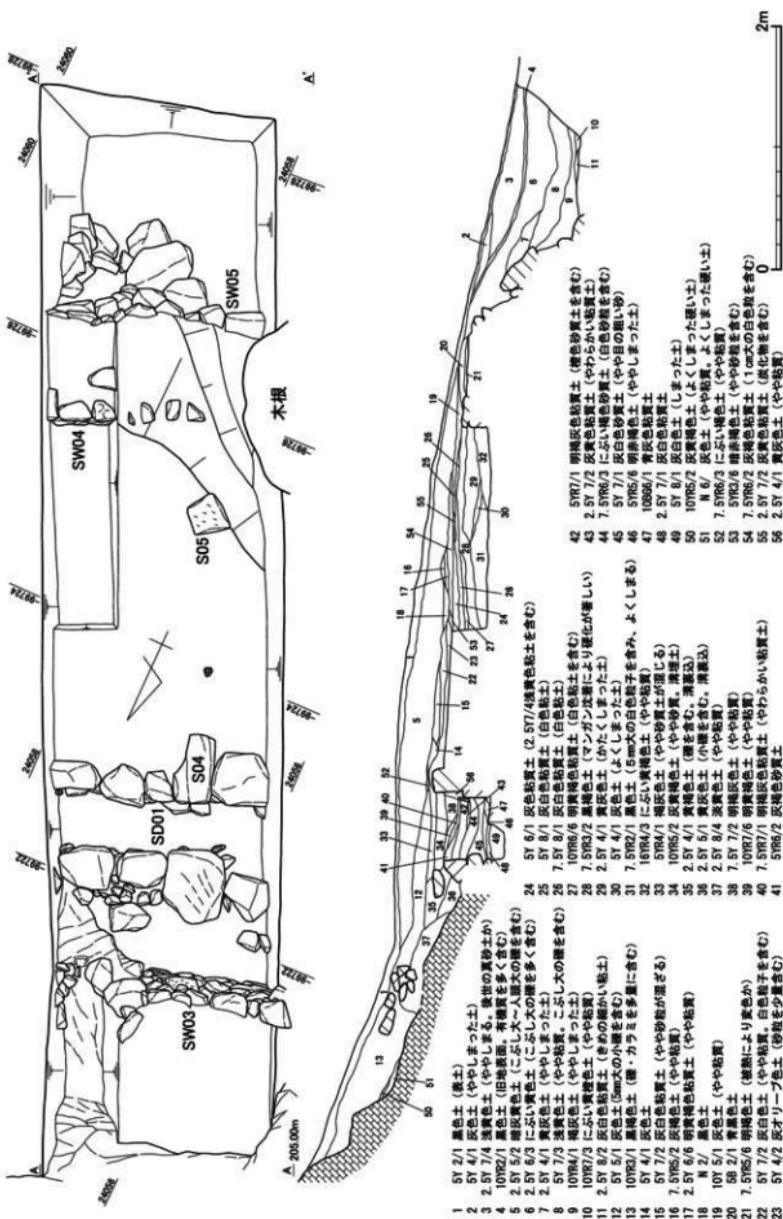
SP 15は、SD 03の南側から岩盤斜面へと流れれる細い溝を切り込んで掘り込まれていることから、他の柱穴よりも新しい可能性がある。

### 【溝跡】 SD 03・04・07・10(Fig. 7・9)

SD 03は、2区西半部の北壁から西壁沿いに位置する溝跡で、北からの水が平坦面に流れ込まないように設けられたとみられる。規模は、幅が上端17~22cm、下端13~15cm、深さ10~18cmである。現状で、水は平坦面中央や東側のSP 04付近から、西へと流れようになっている。SD 03の南側には幅7cm、深さ4cm程度の細い溝があり、SP 15の横を通って岩盤斜面へと続いている。SX 30の北西隅にはSK 03があるが、SD 03と切り合う部分には石を並べて溝の流路としていることから、SK 03の後にSD 03を加工したと考えられる。

SD 04は、SX 30南側の岩盤斜面に加工された溝である。崩落のため本来の規模は分からなくなっているが、現状で長さ約3m、上端幅10~20cm、下端幅約8cm、深さ約13cmである。東西方向に延びているが、崩落のため、流れる方向は不明である。

SD 07はSD 04の北側に位置する溝で、東から



西へ向かって流れるようになっている。SD 03から枝分かれしてSX 30上を横断する2本の細い溝とつながっており、SX 30から流れてくる水を受けて、西へと流す役割も持っていたようである。規模は、幅が上端20cm、下端15cm、深さは10~18cmである。SD 04とSP 07はどちらも東西方向に延びている上、接近した位置に加工されていることから、両者は異なる時期に機能していた可能性がある。

SD 10は、SX 30の中央部を南北に流れる細い溝である。規模は幅が上端12cm、下端8cmである。深さは、西側の壁高が23cm、東側の壁高が11cmで、掘削された平坦面には、溝の東西で10cm以上の高低差がある。また、北端部は浅く、南に向かって傾

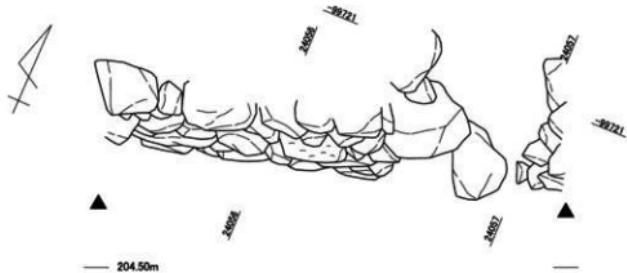
斜しており、南端部から岩盤斜面のSD 04へと水が流れようになっている。

#### 【穴状遺構】SK 02・03(Fig. 7・9)

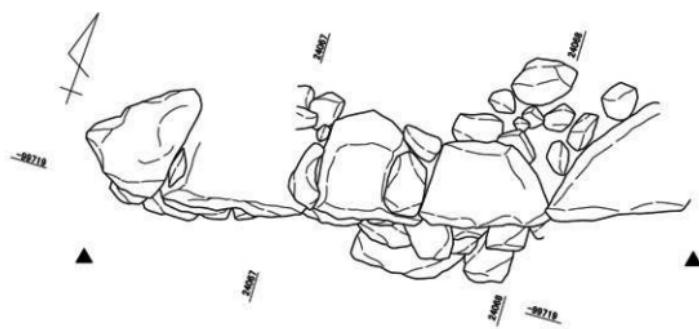
SK 02は、SX 30の中央部で検出された遺構である。規模は、直径55cm、深さ33cmだが、本遺構の北側も浅く掘り込まれている。本遺構の東側にはユリカスが堆積していたことから、選鉱作業に関連する遺構の可能性もある。埋土は上層と下層で様相が異なっており、下層は礫を多く含んだ灰色土が厚く堆積している。上層には炭化物と灰と思われるきめの細かい土があり、火を使っていた痕跡と考えられる。ただし、周囲の岩盤には被熱痕が広がっていないため、小規模かつ短期的なものであったと

Tab. 2 大谷地区検出柱穴一覧表

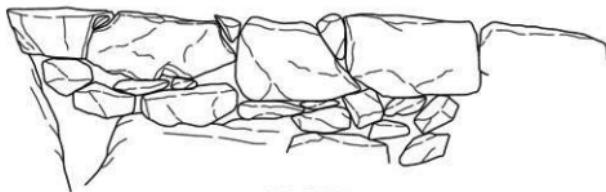
	直径(一辺)	長径(長辺)	短径(短辺)	深さ	平面形
S P O 1	25	-	-	30~38	円形
S P O 2	-	17	10	6	長方形
S P O 3	11	-	-	16	円形
S P O 4	14~15	-	-	18	円形
S P O 5	22	-	-	17~31	円形
S P O 6	23	-	-	13~43	円形
S P O 7	12	-	-	6	円形
S P O 8	15	-	-	11~15	円形
S P O 9	12	-	-	15	正方形
S P 1 0	10	-	-	10	円形
S P 1 1	11	-	-	18	円形
S P 1 2	14	-	-	15	円形
S P 1 3	15	-	-	5	円形
S P 1 4	16	-	-	13	円形
S P 1 5	28	-	-	18	円形
S P 1 6	15	-	-	17	円形
S P 1 7		21	16	10	楕円形
S P 1 8	10			10	正方形
S P 1 9	16			15	円形
S P 2 0		13	15	5	楕円形
S P 2 1	8			4	円形
S P 2 2	9			3	円形



1T SW03



— 204.20m



4T SW02



Fig.12 大谷地区第1地点 SW02・SW03 平面図・立面図 ( $S = 1/20$ )

推察される。最終的にSX 02の最上層及び遺構周辺は粘土で埋められ、整地されている。この時点では、SX 30を完全に平らにする必要があったのかかもしれない。

SX 02の東側で、SD 10によって区切られた位置では、東西約1.3m、南北約70cmの範囲で、粒子の大きさの異なるユリカスが最大で20cm程度堆積しており、付近で選鉱作業が行われていたことが窺われる。

#### 【掘込】 SX 34～45・47・48・69

SX 34～45・47・48・69は岩盤に対して掘り込まれた遺構で、SX 34～38はSX 30北側の岩盤に、SX 39～45はSX 30南側の岩盤斜面に位置する。

SX 34～36は矩形の掘り込みで、幅はそれぞれSX 34が16cm、SX 35が14cm、SX 36が18cm、深さはいずれも6cmである。それぞれ40cm程度離

れて直線的に並んでおり、柱などを立てるための掘り込みとみられる。SX 37・38は円形で、規模はSX 37が径16cm、深さ10～12cm、SX 38が径14cm、深さ8～11cmである。岩盤に対して上向きの斜めに掘り込まれており、垂木などを差し込む穴とみられる。なお、SX 37とSX 38は掘り込まれた方向が異なっていることから、同時期の遺構では無いと判断される。

SX 39・41～45も岩盤に垂直に掘り込まれた矩形の掘り込みである。それぞれの規模は、SX 39が幅20cm、奥行10cm、高さ12cm、SX 41が幅25cm、奥行17cm、SX 42が幅28cm、奥行12cm、深さ4cm、SX 43が幅10cm、奥行4cm、高さ10cm、SX 44が幅17cm、高さ14cm、奥行10cm、SX 45が幅30cm、奥行10cmである。いずれも柱などを立てるための掘り込みとみられる。

SX 40は現状で、長径14cmの楕円形の浅い掘

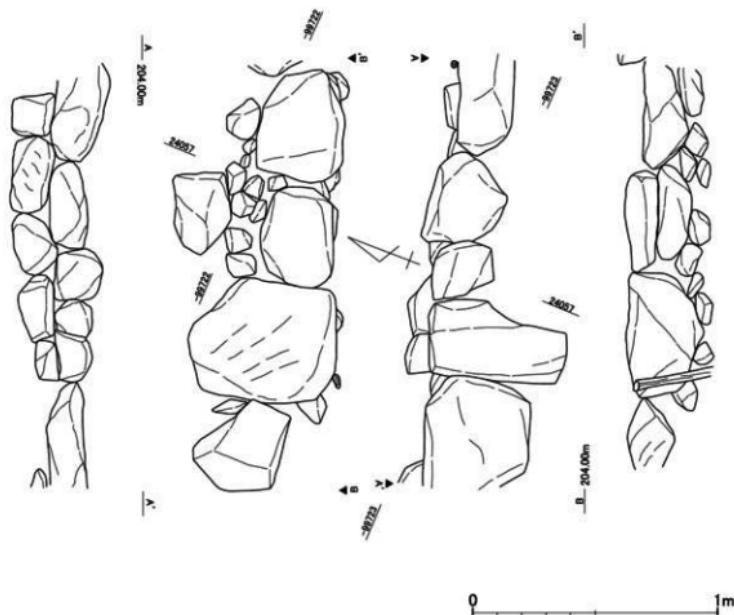


Fig.13 大谷地区第1地点SD 01平面図・立面図 (S=1/20)

り込みで、柱のあて痕と思われる。SP 01・05・06に対応する可能性がある。

SX 47・48 は 2 区と 3 区の境近くにある掘り込みで、SX 47 は北端部、SX 48 は南端部に位置する。規模は SX 47 が幅 30cm、深さ 10cm、SX 48 は幅 8~13cm、深さ 20cm である。SX 47 は柱を立てるため、SX 48 は板状のものを差し込むためとみら

れる。また、SX 47 の東端部には、後から掘り込まれたとみられる SP 10 がある。

SX 69 は、SX 30 の東端部にある掘り込みで、径 10cm、深さ 10cm である。東部は欠落しているが、元々は穴状であった可能性がある。

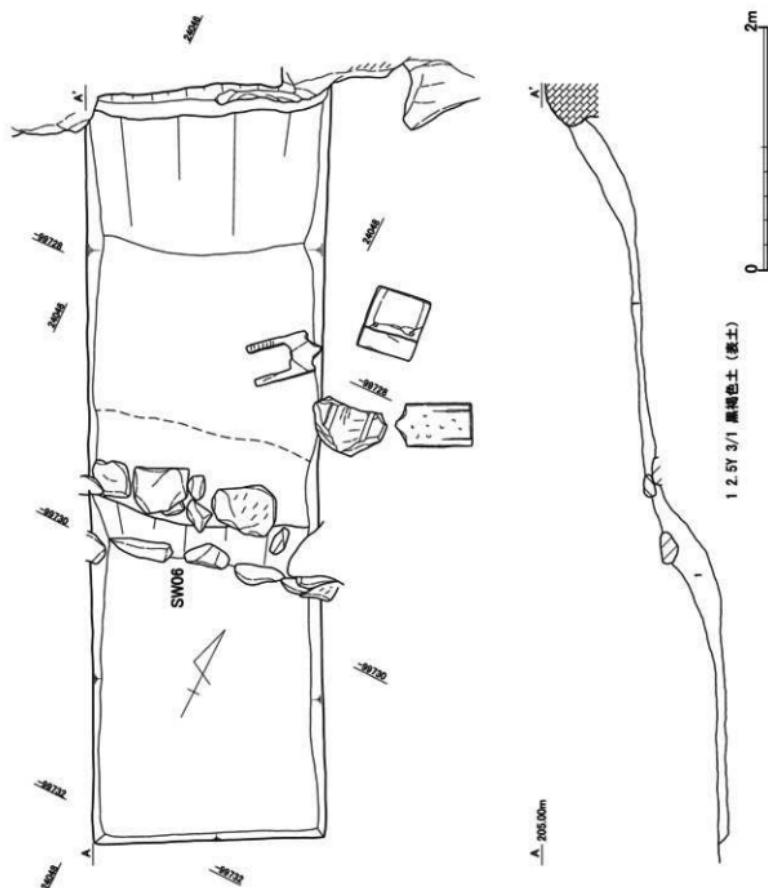


Fig.14 大谷地区第1地点3T平面図・土層断面図 (S = 1 / 40)

### 第3項 3区(Fig.10)

3区は調査範囲の西部にある。調査地北東部のSX 02は、岩盤を「コ」字状に加工して、平坦面を削りだした遺構で、東西約6.7m、南北約2.5mと調査範囲の中でも最も大きく加工された岩盤加工遺構である。複数の平坦面が確認されているが、中央部が大きく崩落している。崩落後も平坦部が加工されているが、広い平坦面とはなっていない。

#### 【平坦面】 SX 53・57・59～61

SX 53はSX 02北東部に広がる平坦面で、東部と北部にはSD 05がある。SX 02で検出された平坦面の中で最も標高が高い。西端部にはSK 05が加工されている。

SX 54はSX 53の南側にある平坦面である。SX 02の西側にあるSX 57とは標高がほぼ一致しており、中央部が崩落する前は同一の平坦面であった可能性も考慮される。東部にSK 04がある。

SX 55は、SX 54の西側に位置する平坦面で、SX 02の中央部が崩落した後に形成された平坦面だが、西に向かって緩やかに下がっており、広い平坦面とはなっていない。

SX 56はSX 53とSX 57との間の北壁沿いにわずかに残った平坦部で、崩落によって大半が失われた可能性がある。

SX 57は、SX 02の北西部に残存する平坦面である。前述したように、本来はSX 54と一緒に平坦面であった可能性がある。SX 57の北部には、SK 06が加工されている。

SX 59は、SX 02の南部に位置する平坦面である。崩落よりも後で加工された可能性もあるが、非常に狭い上に付随する遺構もなく、用途・目的等は不明である。

SX 60は3区西端部の北壁沿いに位置する平坦面で、SD 09、SK 08、SP 14が加工されている。SP 14があることから、周囲に小屋掛けがされていたとみられるが、対となる穴や掘込・垂木穴などはなく、範囲・規模等は不明である。

SX 61は、SX 02の南西に位置する平坦面で、上面を整地した後に、SW 01を配置している。SW 01の南西部には炭の集積と石臼が出土している。

#### 【石列】 SW 01

SW 01は、3区の南側で東西方向に並ぶ石列である。規模は東西約5mで、20～30cm大の礫を南側に面を持たせて並べており、この石列の南北で段差を設けている。SW 01によって南北2段の平坦面を形成しているが、用途については明らかにできない。

#### 【溝跡】 SD 05・09

SD 05は、SX 02の壁面に沿って加工された幅約20cm、深さ約16cmの溝跡である。山側からの水が平坦面へ流れ込まないために設けられた遺構とみられる。水は、北東隅を最高所として、南側と西側に分かれて流れの構造となっている。ただし、SX 53西側からSX 57東側までは崩落によって欠失している。

SD 09は、SX 60の平坦面上に加工された溝で、規模は上端幅17cm、下端幅12cm、深さ16～22cmである。3区西端部の北壁沿いを西から東に流れ、SK 08の手前で南へと折れ曲がっている。

#### 【穴状遺構】 SK 04～06・08

SK 04は、SX 54の南部に位置する丸み方形の掘り込みである。規模は長径83cm、短径70cm、深さ20～30cmである。遺構の北東部がSD 05の土手状の縁につながっており、SD 05を流れた水の一部が流入するようになっている。溢れた水は南東側から流出するようになっている。現状ではSX 54の位置にあるが、機能面ではSD 05に伴っているため、SX 54が加工された段階ではすでにSK 04が掘り込まれていたとも考えられ、SX 53に伴う可能性も考慮される。埋土は表土と礫交じりの土で、具体的な利用方法は不明である。

SK 05は、3区北壁沿いの岩盤が崩落したのに、SD 05を一部切り込んで加工された遺構である。規模は南北48cm、東西100cmである。現状では、SD 05を流れてきた水が流入する構造となっている。水を溜める遺構と考えられるが、用途については不明である。

SK 06は、SX 02の北西隅に加工された遺構で、現状の規模は長径83cm、短径65cmである。SX 57の面から掘り込まれているが、岩盤の崩落によっ

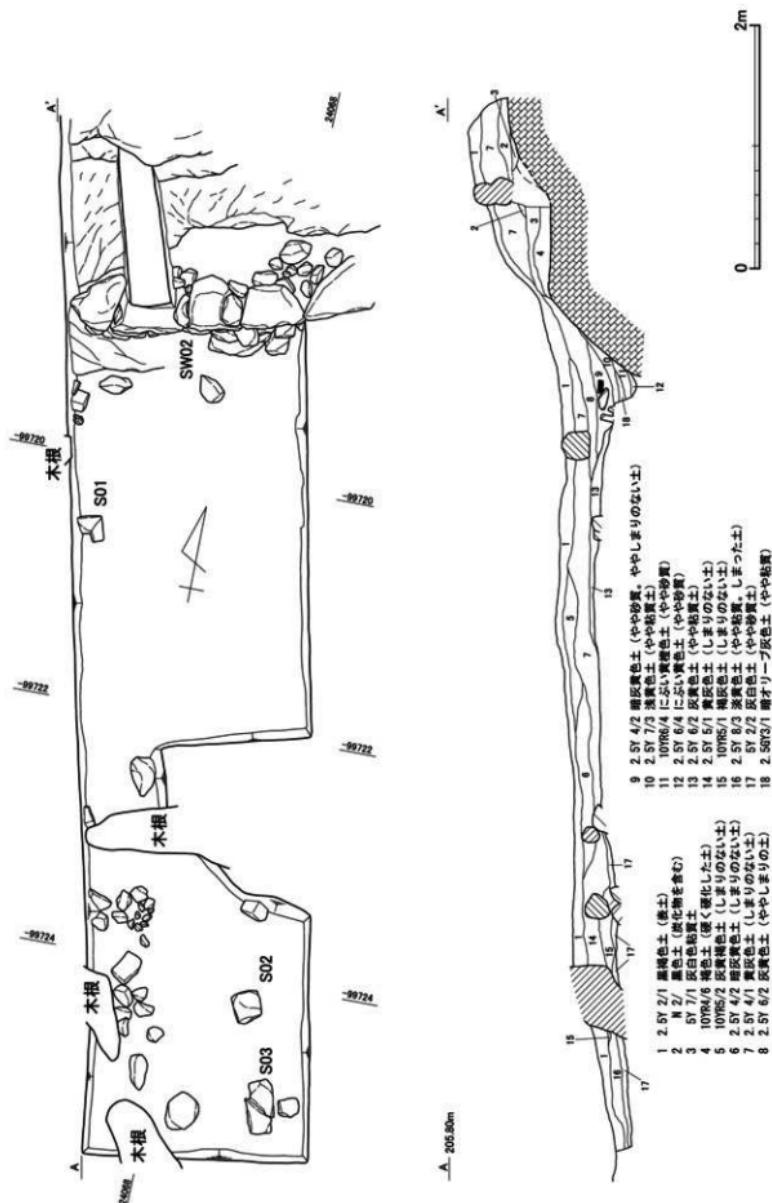


Fig.15 大谷地区第1地点4-T平面図・土層断面図 (S = 1 / 40)

て大きく欠損している。

SX 08は、SX 60上に加工された遺構である。規模は東西42cm、南北36cm、深さ10cmで、平面形は方形である。北壁に幅38cm、高さ33cm、奥行16cmの掘り込みがあるが、本遺構に伴うかは不明である。

#### 【掘込】 SX 63～65・67

岩盤に垂直に掘り込んだ矩形の掘込である。SX 64は一辺が6～7cmの掘込が2つ縦に並んでいるが、用途・目的は不明である。それ以外は岩盤の壁面に柱を立てるための遺構とみられる。それぞれの大きさは、SX 63が幅16cm、高さ17cm、奥行21cm、SX 65が幅33cm、高さ22cm、奥行42cm、SX 67が幅30cm、奥行21cmである。

#### 【不明遺構】 SX 52

SX 52は、2区との境付近に位置する東西約75cm、深さ18～25cmで、東側の岩盤と平行に掘り込まれた遺構である。南端部から北に約1.4mの位置にはSW 01の石列があり、本来はSW 01よりも北へと続いている可能性も考慮されるが、北部は木の繁茂により、調査できなかった。

### 第4項 1トレーナー (Fig. II～13)

1トレーナーは2区の南側に、東西2m、南北約8.8mの規模で設定した。表土から25cm程度下位までは流土によって覆われていたが、流土の下には遺構が良好に残存しており、3つの硬化面が確認された。第1面は、SD 01・SW 05を覆っていた段階の面である。第2面は、SD 01の上面が見えていた段階で、標高は約203.8mである。さらに、トレーナー東壁沿いを一部深掘りした底面にあたる、標高約203.6mの高さでは、SW 04と硬化面を伴う第3面が確認された。

#### 【検出遺構】

SW 03は、1トレーナー北端部から約1.2m南で検出された石積遺構である。検出された標高は、基底部が約203.8m、天端が約204.3mで、高さは約50cmである。積石は、幅10～30cm程度の不揃いな自然石で、東端は岩盤上にのっている。積石には、サイズを調整するために大きく削られたと

みられる箇所が多少あるものの、整形や調整の痕跡はない。積み方は乱積で、南側に面を有するが、目地はそろっていない。明確な裏込めは確認できなかったが、石積みの北側には小礫やカラミが多く含まれる埋土が堆積していた。2区中央部にある466号間歩南側の岩盤が崩落したのちに、平坦面を造成するために構築された石積とみられる。積石に伴う遺物は出土しなかったため、構築時期を明確にすることはできなかったが、南側に位置するSD 01と平行に積まれており、仮に同時期であれば、江戸時代後期に構築された可能性がある。SW 03とSD 01の間には、約60cm(2尺)程度のスペースがあり、犬走りのように機能していたのかもしれない。

SD 01は、トレーナー北端部から約2.3m南で検出された石積の溝跡である。規模は幅約60cm、深さ約44cmで、天端の標高は約203.8m、底面が約203.4mである。北壁と南壁は石積で、底面は白色土の2面水路である。底面は丸く凹んでおり、埋土は砂質土が互層状に堆積していた。積石には、一部を面とりのために削っている部分もあるが、基本的に自然石を用いている。北面は、平面長30～60cm、幅40～50cm、厚さ10～30cmの不揃いな大きさの石を1・2段横積している。石を積んだ後に、10cm大の小礫を、その下に詰めて固定している。積石の北側には、小礫交じりの土が裏込めとして入れられていた。また、トレーナー西壁から約40cm内側の石積前面には、径3cm程度の木製の杭が打ち込まれており、崩落防止のためと推察される。南面は、平面長25～60cm、幅20～50cm、厚さ約20cmの石を2段積み上げている。北面に比べて積石の大きさがややそろっており、目地も通っている。最下部には北面でみられたような小礫はなかった。南側の積石の内、東から2番目の石(S 04)は上面が平らになっており、そこから2m弱(約6尺5寸)南にも、上面が平らな石(S 05)があることから、礎石であった可能性が考慮される。

SD 01は、検出された位置や方向から、建物に伴う排水溝と考えられる。調査範囲が限られているため、流れの方向を明確にできなかったが、トレーナーの東側で南に屈曲し、道の方向に抜けると推定さ

れる。1トレンチから約4m東にある地籍界あたりで屈曲する可能性も考えられるが、確証はない。なお、後述する4トレンチでも建物跡が検出されているが、1トレンチで検出された建物と同一である可能性は低い。

SW 05は1トレンチの南端部で検出された石積である。SW 04とほぼ天端がそろっており、同時期に構築された可能性がある。SW 04との間は約85cm(3尺弱)で、通路として機能していたかもしれない。SW 05から南側で、約90cm下がった面も、白色の粘土が敷かれた人為的な面である。SW 04・05が同時期の遺構であれば、この面も含めた面が同時期となる可能性がある。

SW 04は1トレンチ南部の一部を深く掘り下げた際に検出された石積で、第3面に伴う遺構である。幅20cm、高さ5~10cm程度の小さい石を2段積んでいる。本地区で検出された石積のほとんどは南側

に面を持っているが、SW 04のみ北側に面を持っている。検出範囲が狭いこともあり、機能や意図を推察することは難しい。

#### 第5項 3トレンチ (Fig.14)

3トレンチは、3区の南側に長さ約6.2m、幅約2mで設定したトレンチである。遺構としては、トレンチ中央部からSW 06が検出された。SW 06は、幅40cm程度の削合大きな石を並べた石列である。石の標高は約203.8mだが、その南側は標高203.6mと一段低くなっている。

本トレンチの東側には、凝灰岩製で組み合わせ式の祠があったようだが、調査開始時点ではすでに壊れており、部材が散乱していた。

#### 第6項 4トレンチ (Fig.12・15)

4トレンチは、1区の南部に長さ約7m、幅約2

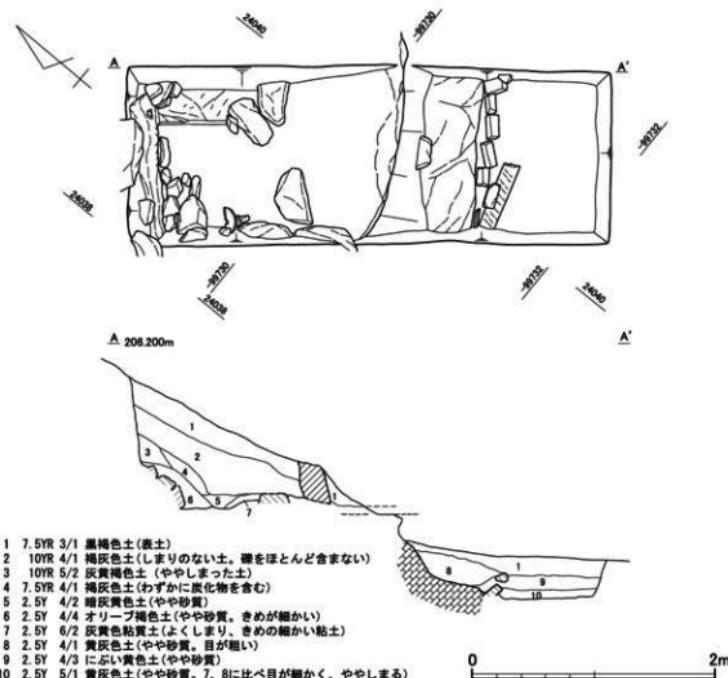


Fig.16 大谷地区第1地点5 T平面図・土層断面図 (S = 1 / 40)

mで設定した。北端部の石積SW 02以外に明確な遺構は検出されていないが、上面が平らに加工され、方形に成形された礎石状の石(S 01～03)が、岩盤の方向と揃えて設置された状態で検出されており、礎石建物の一部の可能性がある。土間面上には赤く被熱した痕跡があり、その上を黄色土で薄く整地し、さらに意図的に充填されたと考えられる白色～黄色粘土が黄色整地層の直上に堆積していた。このように、短期間に内に床面を張り替えていた痕跡が、被熱痕とともに確認されたことから、付近の土間面上には炉跡等の製錬遺構が存在する可能性がある。ただし、今年度の調査範囲では、建物の規模や形、作業内容などを具体的に想定することは難しいため、来年度の調査では、トレントを拡張し、周囲の状況を含めて調査することとしている。

4トレント北端部には、SW 02が所在する。SW 02は、標高約203.5mの岩盤から積まれており、天端の標高は203.9～204mで、東側に向かってやや傾斜している。SX 03の南東部を拡張する目的で設けられたとみられ、南に向かって面をそろえて立てられている。基底部には幅20～40cm程度の小ぶりな石を置いて岩盤とのすき間を埋め、その上に40～50cmの大きな石を設置している。石を積み上げるよりも、積石の中で最も広い面を南側に向けて立て、下部に小ぶりな石を詰めて固定している。積石には削石を用いており、表面の一部に調整痕がある。1区岩盤南東部の窓みを埋めるための盛土とともに構築されており、岩盤上の平坦面を拡張するための遺構とみられる。盛土を掘り込んだ裏込めが確認できることから、盛土後にSW 02を構築したと考えられる。裏込めに栗石等は入っていないかったが、埋土から肥前磁器の広東碗(17)が出土しており、18世紀末以降に構築されたと判断できる。

また、トレント内からは近代の石見焼やガラス片なども出土していることから、江戸時代後半～近代にかけて利用されていたと考えられる。

#### 第7項 5トレント(Fig.16)

5トレントは、調査範囲の中でも西端部に設定し

たトレントである。東西は1～4トレントと同じく約2m、南北は約4mとした。埋土はほとんどが北側からの流土で、トレント北端部では流土の下から岩盤が一部露出する状況であった。ただし、トレントの北端部から2.3mの箇所では、過去の水害などと考えられる外的要因によって、南側部分の遺構面が大きく削られていることが、堆積状態から観察される。この削られた断面には、金属成分の沈着による硬化面が少なくとも3面以上確認できたが、各面の具体的な利用状況を解明するまでには至らず、第1面の確認にとどまった。

5トレントの南部では、南端から約0.9mの箇所で、レンガ7点と、釉薬のかかった瓦1点、延石1点が、東西方向に並んだ状態で出土した。特にレンガは、長手面を上にして立てられた状態で検出された。これらの目的は明確にできていないが、岩盤に沿って並べられていることや、レンガが含まれていることから、近代以降に何らかの構築物があった可能性が想定される。

#### 第5節 出土遺物

採集遺物・出土遺物は、石見銀山における他の地区と同様に肥前陶磁器を中心としている。時期を特定できる遺物としては、外青磁や広東碗・端反碗など、石見銀山編年の6・7期に相当するものがほとんどで、わずかに5期の遺物が含まれている。型紙摺りによって施文された遺物が多く、幕末から近代にかけて製作されたとみられる。

古い時期の遺物としては、肥前陶器では2期が1点(90)と3期が2点(67-68)、貿易陶磁としては、1・2期に相当する白磁と青花がいくつか出土している(42～45、85～88)。

数は多くないものの青花や白磁などの貿易陶磁器がいくつか出土していることから、戦国時代末～江戸時代初期頃には当地が利用されていたことを反映している可能性がある。

#### 第1項 表様

1は肥前磁器の端反碗である。外面には花の丸文と、鳥、松の文様が、外面には口縁部に雷文が、



Fig.17 大谷地区第1地点表探遺物実測図 (S = 1/3、1/6)

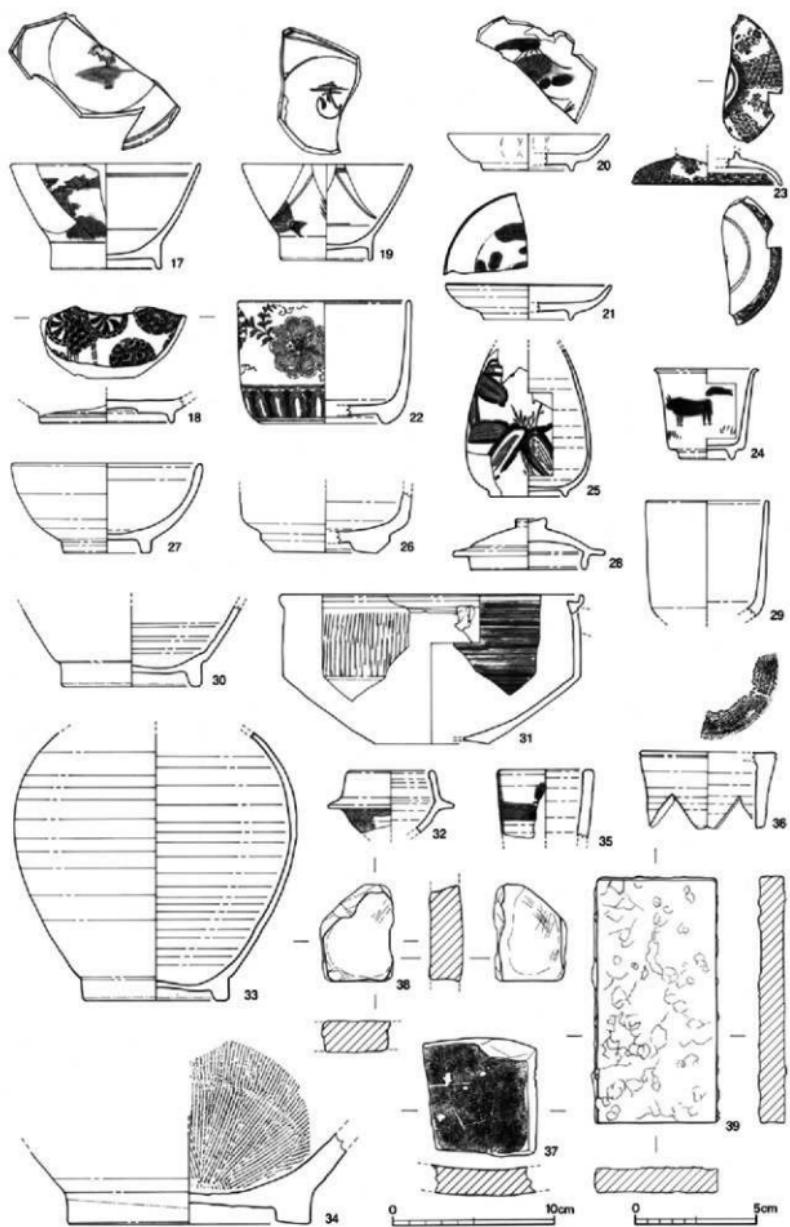


Fig.18 大谷地区第1地点1区出土遺物実測図 (S=1/2、1/3)

見込みには囲線と、やや簡略化された松竹梅の環状文がある。2は碗である。産地の比定が難しいが、断面の観察から瀬戸の新製焼の可能性が高い。底部には焼成時に下に敷いた砂が付着している。外面には銅緑釉で竹が描かれている。3は上絵付の碗で、産地は不明である。外面下部の蓮の文様と、内面の雷文は型紙摺りによる。見込みには環状文

があるが、本来のモチーフが分からぬほど簡略化が進んでいる。4は湯のみで、外面に馬と牛が描かれている。デザインが新しく、茶色に発色する釉薬が使われていることから近代以降の資料と判断できる。底部には三角形のスタンプが押されている。同様の資料が1区の表土から出土している(24)。5は湯のみで、瀬戸の新製焼とみられる。外面の花は

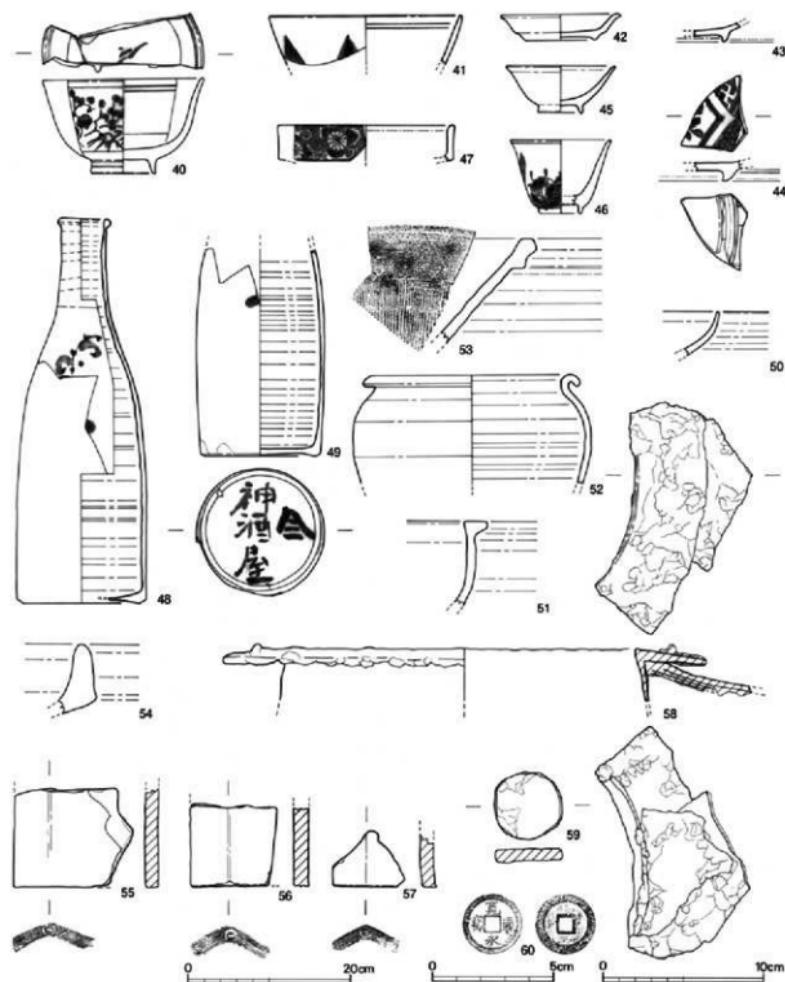


Fig.19 大谷地区第1地点2区出土遺物実測図1 (S=1/2, 1/3, 1/6)

花びらが手書き、中央部は型紙摺りである。6は肥前磁器の壺で、底部には窯着を防ぐための砂が付着している。7は肥前磁器の稜花皿で、蛇の目凹形高台を持つ。内面の松竹梅の環状文から、19世紀前半の資料と考えられる。8は色絵皿で、瀬戸の新製焼である。9・10は皿で、釉薬にコバルトが使用されていることから、いずれも近代以降の資料である。いずれの文様も、ごく一部を除いて型紙摺りによって施されているが、特に10は花の色付け以外の全てが型紙摺りである。10は肥前磁器で、型打ち整形による菊花皿である。11は石見焼の皿である。12は碗で、産地は不明だが、非常に細かく精良な胎土である。一部を欠損するが、口縁の3か所以上をつまんで内側にひねっている。13は土瓶で、鉄絵の文様が描かれている。14は長石釉のかかった石見焼の壺で、見込みに胎土目がある。15は土師質土器で、焜炉とみられる。底部に穴が開いており、これまでの調査では出土例のないタイプである。16はスレート製の石盤で、見つかった3片のいずれも両面に筆記痕が認められる。

## 第2項 1区

17は肥前磁器の広東碗である。18は肥前磁器の皿で、内面の文様がコバルトによることから、近代以降の資料とみられる。底部は蛇の目凹形高台で、内面の文様は型紙摺りによる。19は肥前磁器の広東碗で、体部に焼継による修理痕がある。20は肥前磁器の菊花皿である。21は皿で、瀬戸の新製焼の可能性がある。線刻した文様にコバルトを流

して色を付けている。底部にはカンナによる切り離し痕が残っている。22は肥前磁器の鉢である。文様の線は型紙摺りで、色は筆で塗っている。底部には重ね焼きの際の砂と、わずかな釉薬が付着している。23は肥前磁器で、広東碗の蓋である。内面の囲線以外は全て型紙摺りによる。24は4と同様の湯呑みで、同じく外面には馬と牛が描かれており、底面に三角形のスタンプがある。25は上絵付のある瓶だが、産地は不明である。文様の一部が印版で施されていることから、今回掲載した中でも特に新しい遺物である。26は肥前磁器で、青磁の香炉もしくは線香立てである。底部は蛇の目凹形高台である。27は石見焼の碗で、来待釉や長石釉とは異なる褐色の釉薬がかかっていることから、石見焼の中でも古い資料の可能性がある。28は石見焼の蓋である。29は萩焼の湯のみである。30は石見焼の壺である。31は在地系陶器の鍋である。外面には飛鉋による文様があり、底部は無釉でススが付着している。内面はほぼ全体を刷毛によって釉薬を塗っている。底部の他に断面にもススが付着している。32は石見焼のミニチュア羽釜である。底部にススが付着しており、実際に火にかけて使用していたようである。33は長石釉のかかった石見焼の壺だが、体部のみで口縁部等は欠損している。34は石見焼の擂鉢で、外面に来待釉がかかり、内面には重ね焼きの際の痕跡が残っている。35は焼締陶器である。内面が溶けて自然釉のようになっていることから、ルツボとみられる。36は窯道具のハリである。37は煉瓦の平瓦で、裏面に「申」の字が浅

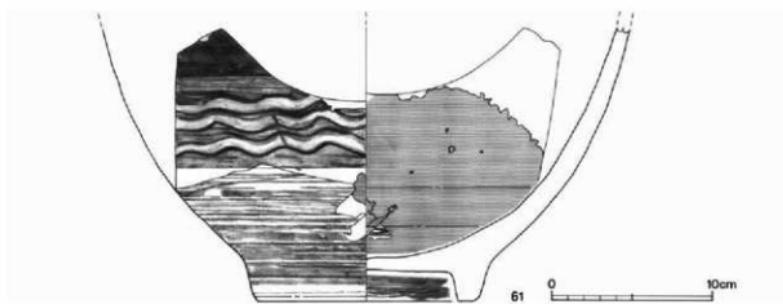


Fig.20 大谷地区第1地点2区出土遺物実測図2 (S=1/3)

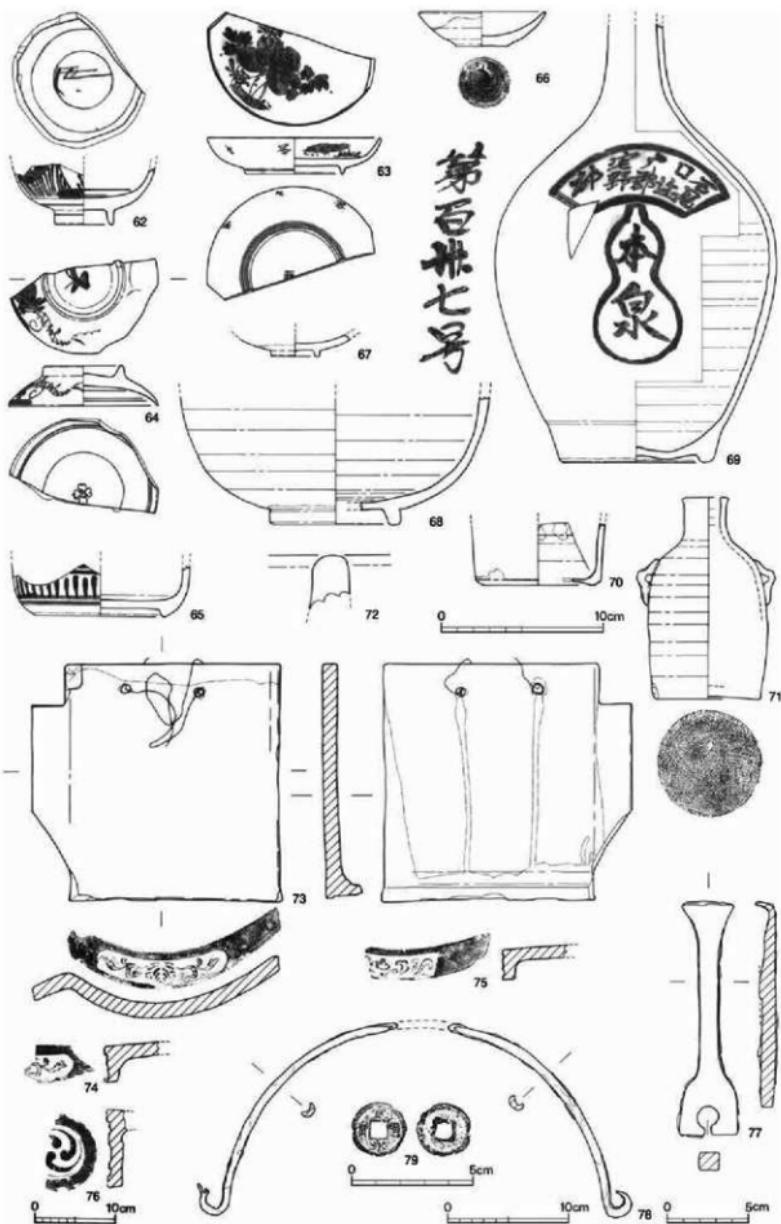


Fig.21 大谷地区第1地点3区出土遺物実測図 (S = 1/2、1/3、1/4、1/6)

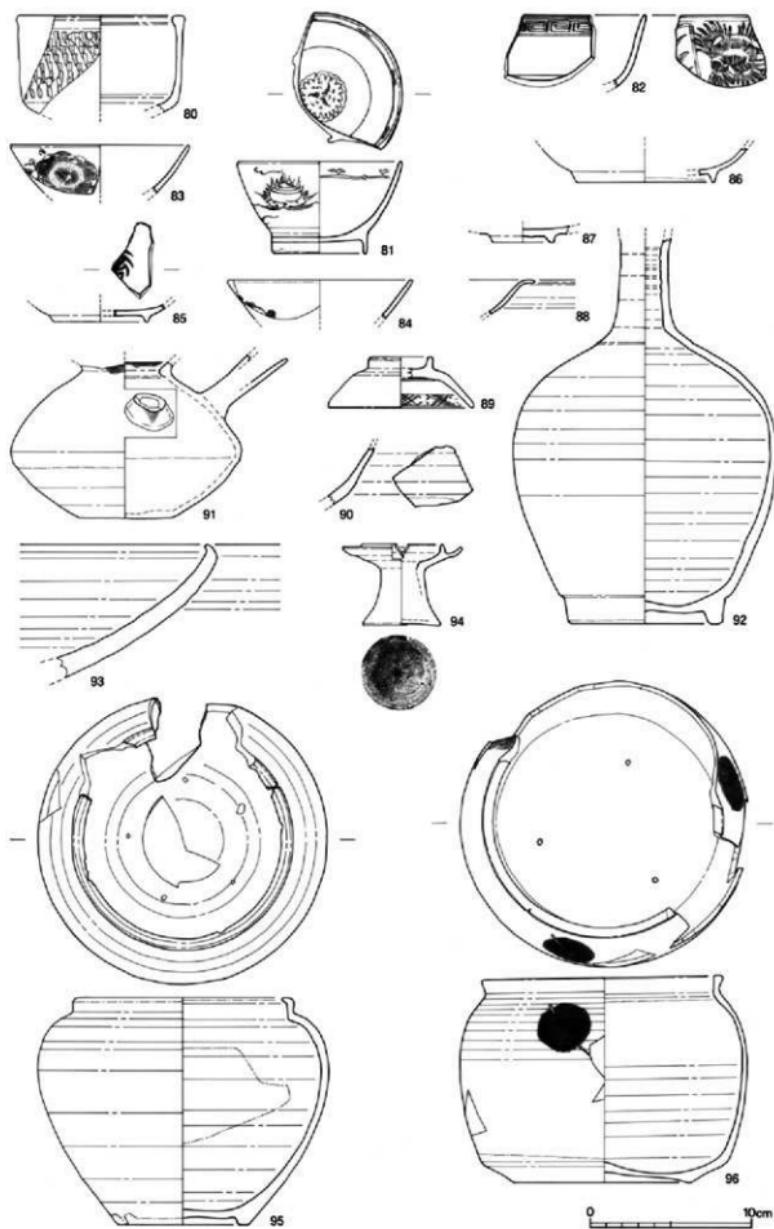


Fig.22 大谷地区第1地点1T出土遺物実測図1 (S=1/3)

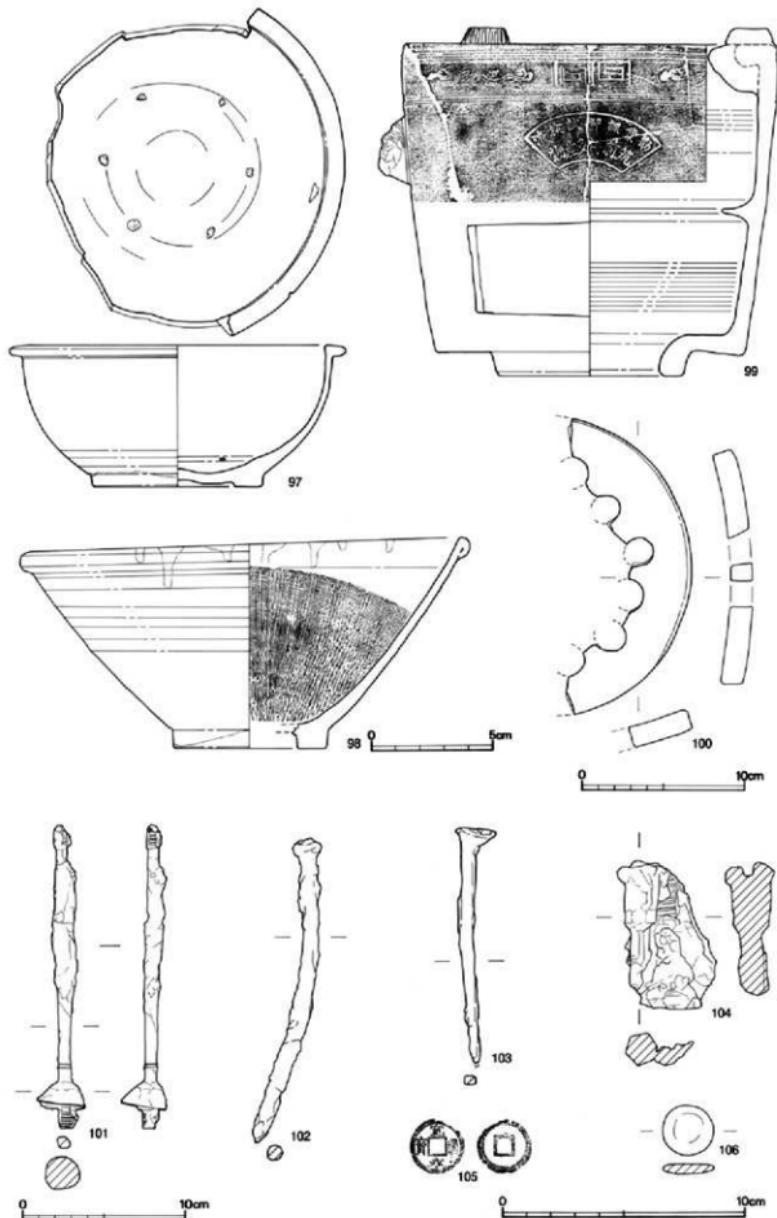


Fig.23 大谷地区第1地点1T出土遺物実測図2 (S = 1/2、1/3、1/4, 1/6)

く線刻されている。これ以外にも線刻があったようだが、破片のため判読できない。38は砂岩製の砥石で、表裏両面に使用痕が認められる。39は鉄製の板である。長方形を呈し、厚さも均一と整った資料ではあるが、用途等は不明である。

### 第3項 2区

40は瀬戸の新製焼で、端反碗である。41は肥前磁器の碗で、外面に芭蕉葉が描かれている。42～45はいずれも輸入陶磁器で、42・43は白磁の皿、44は青花の皿、45は白磁の壺である。白磁は全てE群である。いずれも表土からトレンチ上層で出土した資料であるため、遺構の時期を反映するものではないと判断できるが、本地区が古くから利用されていたことを示す資料として重要である。46は瀬戸の新製焼の壺で、コバルトの発色が鮮やかな近代以降の資料である。47は肥前磁器の段重で、型紙摺りで施文されている。48・49は石見焼の瓶である。

いずれにも鉄絵の施文がある。49の底面には「山三」の紋章と、「神酒屋」が墨書きされており、屋号とみられる。50・51は石見焼で、50は碗、51は鉢である。52は甕で、産地は不明だが、石見焼の可能性もある。非常に精良な胎土と、テカリの強い釉薬が特徴的である。53は擂鉢で、来待釉がかかっており、石見焼ともみられるが、摺り目の上端部を完全にナデ消していないことや、胎土の粒子がやや粗いなどの特徴がある。54は土師質の焙烙で、底面の一部にスグが付着している。55～57は煙瓦で、いずれも棟瓦である。55・56には「一」、57には「五」がそれぞれスタンプされており、窯印とみられる。58は鉄製の鍋で、つばの部分がサビによって癒着している。59はカラミを加工して円盤状にしたものだが、意図用途は不明である。60は鉄貨で、新寛永である。61はSK 01から出土した肥前陶器の壺である。外面には波状文があり、その上に白濁釉がかかっている。また、内面には茶色の付着物がある。

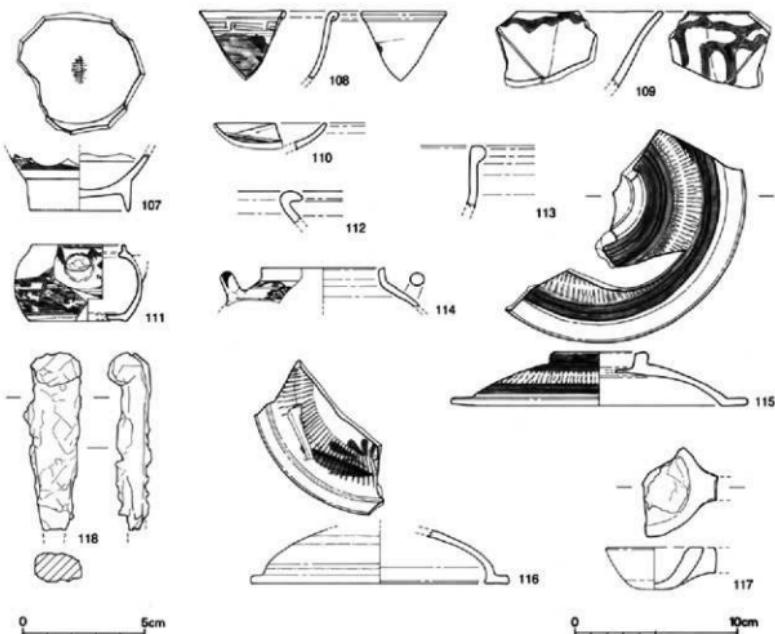


Fig.24 大谷地区第1地点4T出土遺物実測図 (S=1/2, 1/3)

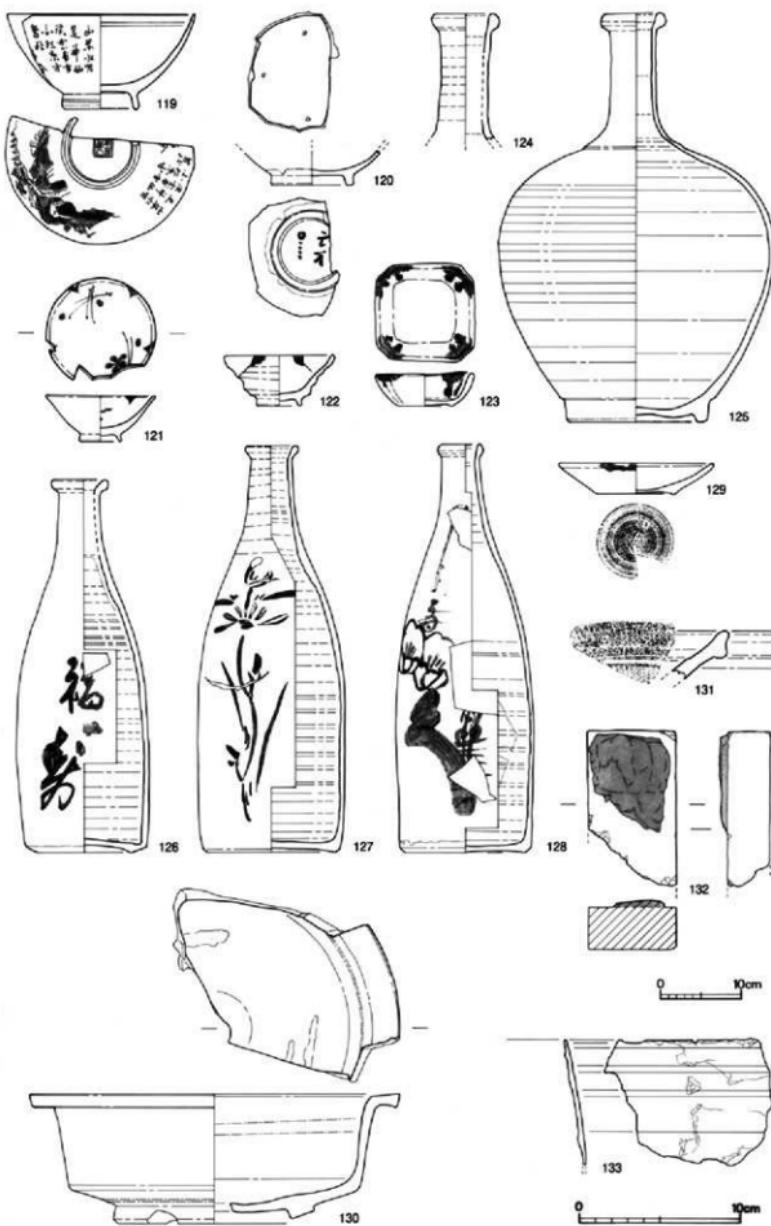


Fig.25 大谷地区第1地点5T出土遺物実測図1 (S=1/3、1/6)

#### 第4項 3区

62は肥前磁器の碗である。63は瀬戸の新製焼の皿である。外面に「玉」「御」「前」の銘を釉薬で書いている。64は肥前磁器で、広東碗の蓋とみられる。内面の中央部には4つの花びらのある花が描かれている。65は肥前磁器で、瓶とみられる。基底で、豊付には砂が付着している。外面の底部にはコバルトで文様が描かれているが、著しく簡略化されている。66は石見焼の皿で、底面に糸切の痕跡が残っている。67・68は肥前陶器で、67が皿、68が鉢である。石見銀山編年3期に相当し、本地区でも古い様相を示す遺物である。69は石見焼の徳利で、外面には鉄絵で文字を書いている。裏にあたると思われる面には扇形の枠の中に「石見国遠摩郡宅野村」と、ひょうたん型の枠の中に「本泉」とある。本泉家は宅野の船問屋であり、酒造業も営んでいた家系である。裏側の「第百両七号」は、取引相手に割り振られた番号とみられる。70は石見焼の瓶である。71は耳付きの瓶で、産地は不明である。72は土製品で、本来は碗形であったとみられる。強い被熱によってボロボロになっている。形状より、ルツボの可能性がある。73～76は軒瓦で、73には瓦止めに使用した銅製の針金も残っている。73・74は来待釉のかかった赤瓦で、同じタイプの瓦

とみられる。75・76は焼瓦である。73～75の瓦当には均整唐草文があり、特に73は中央に桐の文様がある。76は小丸付の軒瓦で、瓦当に巴文がある。77・78は鉄製品である。77は工具の一種とみられるが、用途は不明である。78は鍋の把手である。79は錢貨で、新寛永である。

#### 第5項 1トレンチ

80は外面に鉄釉をかけ、飛鉋で施文した香炉で、線香立てとして使用されていた可能性がある。81は肥前磁器の広東碗で、外面には如意宝珠と雲があり、見込みには植物を丸くデザインした文様がある。82は肥前磁器の碗で、内面には雷文がある。被熱により外面の釉薬が飛んでいる部分がある。83は碗で、肥前系の磁器とみられる。外面には型紙摺りによる牡丹の文様がある。84は磁器の碗だが、胎土は肥前に近いが釉薬は瀬戸の新製焼に類しており、産地の断定が難しい。口唇部の釉薬は焼成前に軽くふき取っている。外面に型紙摺りによる文様がある。85～88は貿易陶磁で、85は青花の皿、86～88は白磁でE群の皿である。89は肥前磁器で、外青磁の蓋である。内面に圈線と四方擣がある。90は肥前陶器の碗で、九州陶磁編年1期に相当する古い資料である。91は土瓶である。急須形をしているが、外面の下半分には釉薬がないほか、スヌ

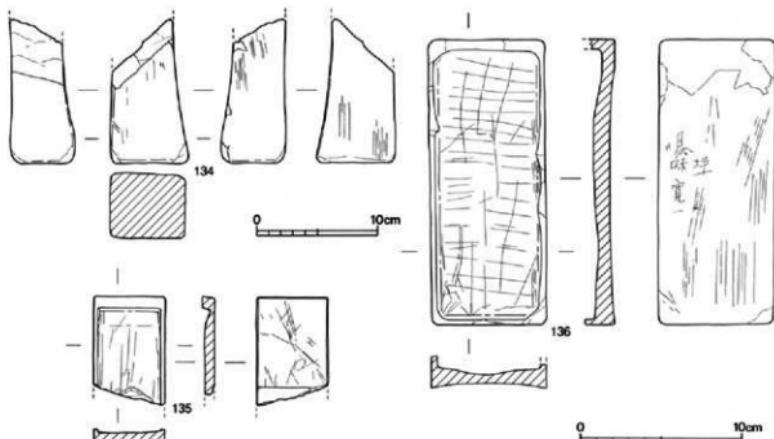


Fig.26 大谷地区第1地点5T出土遺物実測図2 (S=1/3, 1/4)

が付着しており、直接火にかけていたことが窺われる事から、土瓶と判断した。92は石見焼の瓶である。93は備前の鉢で、外面には焼成の際に付着した灰が自然釉のようになっている。94は石見焼の灯火具で、外面の一部には灯芯をかけるためのV字形の切込みがある。また、油をためる部分の底面にはススが付着している。95は石見焼の壺である。口唇部は無釉であるほか、内面底部には胎土目が5つある。96も95と同じく口唇部が無釉の石見焼の壺で、内面底部には重ね焼きの痕跡が3つある。外面には鉄絵の丸文が3つある。97は石見焼の鉢で、内面底部に胎土目が6つある。98は石見焼の擂鉢で、口縁部の一部がわずかに外側へ飛び出しており、片口状になっている。99は土師質の焜炉で、底部に穴がある15と同様の資料である。外面には雷文などの文様が線刻されているほか、体部には獅子形の把手があり、口唇部には突起が3つあるなど、装飾的である。特に、外面中央付近には扇形の囲いの中に「筑前博多産物勧業課御試験済」とあることから、本資料が福岡県で作られたことがわかる。口唇部にある突起の下には、ものを載せるための五徳状の出っ張りがある。金属製品としては、釘・ボルト・錢貨などが表土から出土している。

#### 第6項 4トレンチ

107は肥前磁器の広東碗である。108は肥前磁器で、丸縁の鉢である。109は肥前磁器で、型起こしの角鉢である。焼継による修理痕がある。110は肥前磁器の皿で、内面に2条の線による文様がある。111は瀬戸の新製焼とみられ、茶瓶である。底部と口縁部付近は露胎している。112・113は石見焼で、112は壺、113は鉢である。114は土瓶だが、产地は不明である。鉄絵で文様が描かれているほか、銅緑釉による丸い文様もある。115は石見焼の蓋だが、外面の刷毛目以外には釉薬がかかっていない。刷毛による施釉は2条で、その間には飛鉋による施文が2条ある。116は、产地は不明だが蓋である。外面には飛鉋による施文が2条あるほか、白い釉薬で花を描いている。117は破損しているものの把手のようなものがある碗状の土製品である。強く被熱

して表面がもろくなっているほか、内面には付着物があることから、ルツボの可能性がある。118は金属製品で、太い釘ではないかとみられる。

#### 第7項 5トレンチ

119は磁器の碗で、产地の判断が難しいが胎土は瀬戸に近い。120は石見焼の碗で、内面底部に胎土目がある。底面には墨書きがあるが、判読できない。121～123は瀬戸の新製焼である。121が小壺で、内面のみ色絵の施文がある。122は壺で、口縁の一部に鉄釉をわずかにつけている。123は角小皿で、内面の4隅に鉄釉をつけている。124～128はいずれも石見焼の瓶だが、124は口縁部から頸部のみで、体部は欠損している。125は体部が丸く膨らみ、126～128は鏡子形である。129は石見焼の皿だが、外側口縁部にタール状の付着物があることから、灯明皿として使用されていたとみられる。130は石見焼の可能性があるが、断定はできない。底部に穴が開いていることから、植木鉢とみられる。内面には胎土目の痕跡がある。高台には一部に切り込みがあり、底部の穴から出た水を外へ流すための工夫とみられる。131は擂鉢で、元々は口唇部付近まで掘り目があったようだが、口唇部から3cm程度まではナデ消している。胎土や調整からは、石見焼や須佐焼ではないと判断できるが、具体的に断定できない。132はレンガで、型枠に押し固めて作るタイプである。長辺は欠損しているが、幅・厚さは規格品に近い。表面にモルタルが付着している。

133は鉄製鍋の一部である。134は凝灰岩質の砥石で、4面に使用痕がある。135・136は泥岩製の硯である。136の表面には横方向の線がいくつか刻まれている。裏面には人名とみられる「寛一」と、それ以外にも何文字か線刻されているが、判読できない。

Tab. 3 大谷地区出土遺物一覧表 I

種別番号	出土地点	種別	器種	大きさ(cm)			色調・釉薬	成形・調整・文様	備考
				口径	器高	底径			
1	表探	肥前磁器	碗	9.6	5.4	3.6	透明釉	雷文	
2	表探	瀬戸か	碗	11.3	5.4	4.2	透明釉		
3	表探	不明磁器	碗	(10.5)	5.6	(4.0)	透明釉	雷文 上絵付	
4	表探	不明磁器	湯のみ	6.0	5.5	3.0	透明釉		
5	表探	瀬戸か	湯のみ	(6.8)	7.0	(4.0)	透明釉		
6	表探	肥前磁器	杯	(5.8)	4.9	2.6	透明釉		
7	表探	肥前磁器	皿	(12.2)	2.3	8.1	透明釉	蛇の目四形高台 梅花	
8	表探	瀬戸か	皿	(10.9)	1.9	(6.5)	透明釉	色絵	
9	表探	不明磁器	皿	12.0	2.0	6.7	透明釉		型紙摺り
10	表探	肥前磁器	皿	13.0	3.3	8.9	透明釉	蛇の目四形高台 菊花	型紙摺り
11	表探	石見	皿	13.3	2.3	6.1	長石釉	胎土目	
12	表探	不明陶器	碗	11.2	4.8	4.5	薺灰釉		
13	表探	不明陶器	土瓶	(7.6)	(4.4)		長石釉	鉄絵	
14	表探	石見	壺	10.0	13.7	8.3	長石釉		
15	表探	土師質土器	焼物か		(8.7)	(9.5)	褐色		
種別番号	出土地点	種別	器種	大きさ(cm)			色調	重量(g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
16	表探	石製品	石盤	18.8	15.5	0.4	暗灰色	164.0	
種別番号	出土地点	種別	器種	大きさ(cm)			色調・釉薬	成形・調整・文様	備考
				口径	器高	底径			
17	1区灰色粘土層下	肥前磁器	碗	(11.6)	6.5	6.8	透明釉		広東碗
18	1区炭化物層	肥前磁器	皿		(1.6)	(8.0)	透明釉	蛇の目四形高台	
19	1区表土	肥前磁器	碗	(10.2)	6.0	(5.4)	透明釉	拭き取り	焼締
20	1区東側表土	肥前磁器	皿	(9.8)	2.3	(5.4)	透明釉	口サビ 菊花	
21	1区表土	瀬戸か	皿	(10.2)	2.2	(5.4)	透明釉		
22	1区表土	肥前磁器	鉢	(10.2)	7.6	(7.7)	透明釉		
23	1区表土	肥前磁器	蓋	(9.1)	(2.1)		透明釉	青海波文様	
24	1区表土	不明磁器	湯のみ	(6.2)	5.6	3.2	透明釉		
25	1区表土	不明陶器	瓶		(9.1)	(4.7)	長石釉	上絵付色絵	
26	1区表土	肥前磁器	香炉		(3.9)	(6.4)	(外)青磁釉	蛇の目四形高台	
27	1区東側表土	石見	碗	(11.6)	5.6	5.2	アメ釉		
28	1区表土	石見	蓋	7.2	3.2	つまみ付 1.9	長石釉		
29	1区表土	萩	湯のみ	(7.4)	(7.2)		透明釉		
30	1区表土	石見	壺		(5.0)	8.4	長石釉		
31	1区表土	在地系陶器	鍋	(18.3)	9.2	(7.0)	褐釉	刷毛目 飛跑	スス付着
32	1区表土	石見	ごろぎ釜	(5.2)	(3.8)		来待釉		スス付着
33	1区表土	石見	壺		(16.5)	8.6	長石釉		
34	1区東側表土	石見	すり鉢		5.6	14.8	(内)サビ釉 (外)来待釉	重ね積み痕	
35	1区表土	焼締陶器	ルツボ	(5.0)	(4.3)		淡黄色	鉄絵	スス付着

Tab. 4 大谷地区出土遺物一覧表 II

36 拂岡 番号	1区表土 出土地点	窯道具 種別	ハリ 器種	上面径 (8.2)	高さ 4.7	下部径 (7.0)	灰白色 色調	重量 (g) 備考
				現存長	大きさ (cm) 現存幅 現存厚	口徑 器高 底径		
37	1区表土	瓦	平瓦	7.4	7.1	1.9	灰色	114.7
38	1区表土	石製品	砥石	6.0	4.5	2.1	に赤い褐色	70.7
39	1区表土	鉄製品	鉄板	10.1	5.2	1.1		332
拂岡 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調・釉薬	成形・調 整・文様 備考
				口徑	器高	底径		
40	2区表土	瀬戸か	碗	9.8	5.9	3.8	透明釉	
41	2区表土～2層	肥前磁器	碗	(11.8)	(3.1)		透明釉	
42	2区表土～2層	白磁	皿	(7.4)	1.6	(4.3)	白磁釉	中国
43	2区表土	白磁	皿		(1.2)		白磁釉	中国
44	2区表土	青花	皿		(1.2)		透明釉	
45	2区表土～2層	白磁	杯	(6.6)	2.9	(2.7)	白磁釉	
46	2区表土	瀬戸	杯	(6.1)	5.1	(2.4)	透明釉	
47	2区SK 01上層	肥前磁器	段重	(10.4)	(2.2)		透明釉	
48	2区表土	石見	瓶	2.7	23.8	(7.1)	長石釉	鐵絵
49	2区表土・表土～2層	石見	瓶		(16.8)	6.7	長石釉	鐵絵
50	2区SK 01上層	石見	碗		(2.7)		長石釉	
51	2区表土	石見	鉢		(5.2)		長石釉	
52	2区表土	不明陶器 石見焼か	甕	(12.4)	(6.7)		褐釉	
53	2区表土	不明陶器 石見焼か	すり鉢		(6.5)		褐釉	
54	2区表土～2層	土師質土器	焰塔		(4.3)		橙色	スス付着
拂岡 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g) 備考
				現存長	現存幅	現存厚		
55	2区平坦面西側	瓦	棟瓦	12.3	14.8	4.2	灰白色	420
56	2区平坦面西側	瓦	棟瓦	10.5	10.3	4.3	暗灰色	290
57	2区表土～2層	瓦	棟瓦	7.0	8.4	3.5	灰白色	105.7
58	2区表土	鉄製品	鍋	(20.1)	(3.5)			208
59	2区表土～2層	カラミ	円形容盤状	4.2	4.2	0.9	暗灰色	カラミを加工
60	2区表土	銭貨	寛永通寶	2.3	2.3			2.8
拂岡 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調・釉薬	成形・調 整・文様 備考
				口徑	器高	底径		
61	2区SK 01	肥前陶器	壺		(16.8)	13.3	白濁釉	刷毛目
62	3区表土	肥前磁器	碗		(3.6)	3.5	透明釉	
63	3区表土	瀬戸か	皿	(10.5)	2.3	(5.9)	透明釉	路あり
64	3区表土～2層	肥前磁器	蓋	(9.1)	2.5	つまみ付 4.8	透明釉	
65	3区表土	肥前磁器	瓶か		(3.2)	8.0	透明釉	
66	3区表土	石見	皿	7.6	2.2	3.2	長石釉	
67	3区マンガン沈着層上	肥前陶器	皿			3.0	灰釉	
68	3区南側	肥前陶器	鉢			(8.1)	灰釉	
69	3区表土	石見	徳利		(27.1)	8.8	長石釉	鐵釉文字

Tab. 5 大谷地区出土遺物一覧表III

70	3区表土～2層	石見	瓶		(6.8)	長石釉		
71	3区表土	在地系陶器	瓶	2.2	12.5	6.5	透明釉	
72	3区2層	土製品	ルツボか		(3.3)		褐色	
捕団 番号	出土地点	種別	器種	大きさ(cm)			色調	重量(g)
				現存長	現存幅	現存厚		
73	3区表土	瓦	軒瓦	29.5	30.8	7.7	来待釉	3310
74	3区表土	瓦	軒瓦	8.0	8.8	5.0	来待釉	152.3
75	3区表土	瓦	棟瓦	8.4	15.5	4.2	暗灰色	410
76	3区表土～2層	瓦	小丸付軒瓦	9.6	6.3	2.5	暗灰色	145.6
77	3区南側	鉄製品	工具	14.5	3.8	1.1		125.0
78	3T表土	鉄製品	鋸把手	35.6	15.9	0.5		137.0
79	3区第1遺構面	錢貨	寛永通寶	2.2	2.2			1.5
捕団 番号	出土地点	種別	器種	大きさ(cm)			色調・釉薬	成形・調 整・文様
				口径	器高	底径		
80	1T S D 01 砂層	不明陶器	線香立て	(9.0)	(6.0)		透明釉	飛跑
81	1T表土下	肥前磁器	碗	(10.0)	5.7	(6.5)	透明釉	妙意宝珠文様
82	1T表土	肥前磁器	碗		(4.5)		透明釉	雷文
83	1T表土	肥前系磁器	碗	(10.8)	(3.0)		透明釉	
84	1T表土	不明磁器	碗	(11.2)	(2.5)		透明釉	拭き取り
85	1T表土	青花	皿		(1.1)	(5.6)	透明釉	
86	1T表土	白磁	皿		(2.1)	(8.4)	白磁釉	中国
87	1T表土	白磁	皿		(1.0)	(3.8)	白磁釉	中国
88	1T表土	白磁	皿		(2.1)		白磁釉	中国
89	1T表土	肥前磁器	蓋	8.8	3.2	つまみ径 (3.6)	(内)透明釉 (外)青磁釉	四方擲文
90	1T表土	肥前陶器	碗		3.2		灰釉	
91	1T表土	不明陶器	急須型土瓶か		(10.1)	5.8	葛灰釉 銅綠釉	スス付着
92	1T表土	石見	瓶		(23.8)	9.0	長石釉	
93	1T表土	備前	鉢		(7.3)		にぶい赤褐色	
94	1T表土	石見	火袋具	7.3	5.0	4.6	長石釉	
95	1T表土	石見	壺	12.2	14.0	8.0	長石釉	胎土目
96	1T表土	石見	壺	13.9	12.8	10.9	長石釉	重ね積み痕 鉄鉻
97	1T表土	石見	鉢	(24.4)	11.7	(13.7)	長石釉	胎土目
98	1T表土	石見	すり鉢	35.5	17.4	12.3	来待釉 褐釉	
99	1T表土	土師質土器	焜炉	18.0	21.5	11.2	橙色	スス付着
捕団 番号	出土地点	種別	器種	大きさ(cm)			色調	重量(g)
				現存長	現存幅	現存厚		
100	1T表土	土製品	サナ	18.4	8.4	2.4	橙色	
101	1T表土	鉄製品	不明	18.7	3.0	2.8		62.5
102	1T表土	鉄製品	釘	12.7	1.2	1.2		17.9
103	1T表土	鉄製品	釘	9.7	1.7	0.6		8.4

Tab. 6 大谷地区出土遺物一覧表IV

104	1 T 表土	鉄製品	ボルト	6.2	4.1	2.0		65.2	
105	1 T 3 層	銭貨	寛永通寶	2.2	2.2			2.0	
106	1 T 表土	石製品	轡石	2.1	2.1	0.4	黒色	2.7	
補岡 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調・輪葉	成形・調 整・文様	
				口径	器高	底径			
107	4 T 上面粘土層	肥前磁器	碗		(3.5)	6.0	透明釉		広東碗
108	4 T 上層黒褐色砂質土	肥前磁器	鉢		(4.3)		透明釉		
109	4 T 燥土面上粘土層	肥前磁器	鉢		(4.7)		透明釉		焼鉢
110	4 T 燥土面上粘土層	肥前磁器	皿		(1.6)		透明釉		
111	4 T 表土・不明遺構・ 上面粘土層	瀬戸か	茶瓶	(5.6)	(4.7)	(6.0)	透明釉		
112	4 T 表土	石見	壺		(2.0)		長石釉		
113	4 T 表土	石見	鉢		(3.9)		長石釉		
114	4 T 上面粘土層	不明陶器	土瓶	(6.8)	(2.4)		長石釉		
115	4 T 不明遺構・灰色粘 土層	石見	蓋	(15.0)	3.4	つまみ径 (5.4)	(外) サビ釉	刷毛目 飛跑	
116	4 T 燥土面上粘土層・ 上面粘土層	不明陶器	蓋	(13.0)	(3.3)		(外) サビ釉	飛跑 白濁釉	
117	4 T 上面粘土層	土製品	ルツボか	(4.4)	2.6	(2.2)	灰色		付着物あり
補岡 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
118	4 T 表土	金属製品	釘か	7.3	2.3	1.8		36.4	
補岡 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調・輪葉	成形・調 整・文様	備考
				口径	器高	底径			
119	5 T 表土～2層	不明磁器	碗	11.4	5.8	4.4	透明釉 サビ釉	口サビ	
120	5 T 表土～2層	石見	碗		(2.1)	4.9	長石釉	胎土目	墨書
121	5 T 表土	瀬戸か	小杯	6.6	2.9	2.5	透明釉	色絵	
122	5 T 表土	瀬戸	壺	(6.1)	3.1	2.7	透明釉 黄釉		
123	5 T 表土	瀬戸	角小皿	5.9	2.1	3.2	透明釉 黄釉		
124	5 T 表土	石見	瓶	3.8	(7.8)		長石釉		
125	5 T 表土	石見	瓶	3.6	25.3	8.3	長石釉		
126	5 T 表土	石見	瓶	3.2	23.0	5.8	長石釉	铁釉 白濁釉	
127	5 T 表土	石見	瓶	2.9	25.1	7.9	長石釉	铁釉 白濁釉	
128	5 T 表土	石見	瓶	2.4	25.2	7.4	長石釉	铁釉 白濁釉	
129	5 T 表土	石見	灯明皿	9.4	1.9	4.8	長石釉		タール状付着物
130	5 T 表土～2層	石見か	植木鉢	(22.8)	8.0	(12.0)	サビ釉 灰釉	重ね積み痕	
131	5 T 表土	不明陶器	すり鉢		(3.0)		サビ釉		
補岡 番号	出土地点	種別	器種	大きさ (cm)			色調	重量 (g)	備考
				現存長	現存幅	現存厚			
132	5 T 表土～2層	土製品	レンガ	10.8	19.2	6.3	橙色	1100	モダ付着
133	5 T 表土～2層	鉄製品	鍋		器高 (7.7)			12.4	
134	5 T 表土～2層	石製品	砾石	11.8	6.5	5.3	灰褐色	575	
135	5 T	石製品	硯	6.7	4.4	0.8	灰赤色	39.8	
136	5 T 北側表土	石製品	硯	17.5	7.1	1.9	赤灰色	295	

# 第3章 総括

## 第1節 本年度の調査成果

本年度より大谷地区の発掘調査を開始した。調査によって、主に以下の3点が明らかとなった。  
①大谷地区においては、戦国時代末もしくは江戸時代初期から、近代にいたるまで継続的に利用されていた。

②調査地北部に展開する岩盤は、江戸時代を通じて利用されており、段階的に加工が進んでいったことが明らかとなった。特に、2区の平坦面上ではユリカスが廃棄されていたことから、近隣で還鉱作業が行われていたとみられる。

③調査地南部の平坦面では、江戸時代後期には建物が立っていた痕跡が確認できた。それらの中でも4トレンチでの検出状況からは、当地に製鍊所が存在していた可能性が高い。

## 第2節 岩盤加工遺構の展開

### 第1項 岩盤加工遺構の概要

調査区北部の岩盤には、多くの遺構が加工されていることが、明らかとなった。これらの遺構は本文中でも指摘したように、一度に加工されたものではなく、段階的に増えていく、現状で確認できるのは最終的な加工の痕跡である。1～3区の全てで岩盤が崩落しているが、その後も加工がされていることから、当地が江戸時代から近代にかけて継続的に利用されていたことが窺われる。本節では、1～3区での岩盤加工の展開について考察する。

### 第2項 1区

1区で検出された岩盤加工遺構は、中央部の崩落を挟んで大きく2時期に分けることができる。まず、崩落以前に加工されていた遺構としては、北壁のSD 02と、SD 02直上の小穴、SX 09・13がある。この時期には、SX 09～13の広い範囲が平坦面として利用されていたと想定される。ただし、SX 09とSX 13では標高が

異なっていることから、一連の区画内での段差や、時期の異なる遺構の可能性がある。時期差によるものであれば、崩落前も段階的に加工されていたことになる。また、SD 02上の小穴が垂木のものであれば当時は岩盤に沿って建物があったと考えられる。

中央の岩盤が崩落すると、1区では広い平坦面が加工されなくなるが、SX 05～08や、SX 10・11が加工されており、SX 01全体ではなく一部を利用する小規模な平坦面の加工へと変化している。この中で、SX 05・06・07は、柱を立てた痕跡と考えられ、直線的に並んでいることから、同一の建物遺構の可能性がある。また、SX 08はSX 07を切り込んでおり、崩落後にも何度も段階を経て加工されたものと推察される。

崩落とは関係ないが、1区北東部の岩盤には面がそろっていない箇所がある。江戸時代後期にはこの部分にSW 02を構築して、平坦面を拡張していることから、当時は岩盤の前面で、広い平坦面が利用されていた可能性がある。

### 第3項 2区

2区では、当初は岩盤に露出した細脈を探掘する小規模な露頭掘りが行われ、その後に岩盤が加工されていったとみられる。466号間歩も、開口部が現在残っているSX 19・30よりも10cm程度高いことから、当地に残っている遺構が加工されるよりも前に採掘されていた可能性が高い。その後、当地に平坦面が加工されたと考えられるが、SX 30より一段階古いSX 31も一部が残っていることから、段階的に加工されたものと推察できる。

次に、2区の岩盤に平坦面や穴状遺構・柱穴などの現在確認できる遺構が加工されていく、作業場的な空間として整備されたと考えられる。平坦面で確認できる遺構の中で最も古いのは、SK 03と推定される。SK 03は、当初は水溜として

機能していたと考えられる。しかし、S X 30 を加工し、その壁沿いに S D 03 が加工される段階では、中に石が並べられて S D 03 の一部となっていたよう、水溜としての機能は失われている。この段階では、466 号間歩の前面はまだ崩落しておらず、2 区の全面が広い平坦面となっていた可能性がある。平坦面上や周囲の岩盤斜面には柱穴や掘込が多く加工されていることから、簡易的な小屋掛けがあったと推定される。現状で直線的に並んでおり、建物として認識できる柱穴・掘込は、S P 01 ~ 06 と S X 40 のみである。柱穴は、建替などに応じて数が増えていく、結果的に今の状況が形成されたのであろう。なお、S D 03 北西部の、くの字形に大きく加工されている岩盤は、S D 03 等他の遺構に比べて加工痕の様子が異なっており、風化も比較的進んでいないことから、掘り込まれた時期が新しい可能性がある。

その後、466 号間歩の南側が崩落して 2 区は東西に大きく分かれたが、崩落後にも柱穴や掘込などは加工されていたようである。崩落によって低くなった箇所には、S W 03 を構築して土を盛り、平坦地をつくっている。本文でも指摘したように、S W 03 は江戸時代後期に構築された可能性がある。ところで、崩落部の東側は、466 号間歩の東壁から直線的になっており、鉢脈に沿って壊れたとみられる。

S X 19・30 には S K 01・02・09 などの水を溜めたと考えられる遺構が多く加工されていることから、2 区周辺では、水を多く使用していたことが窺われる。S X 30 の東部にユリカスが廃棄されていたことからは、近隣で選鉱作業が行われていたと推察される。ただし、出土したユリカスは量が少ないため、常時廃棄されていたとは考えにくい。調査地付近に選鉱施設があり、そこから排出されるユリカスの一部が、何らかの理由によって残存したのではないだろうか。

#### 第4項 3区

3 区では、岩盤を加工した平坦面が段階的に形成されていった状況が確認できた。3 区で最も

古い遺構は、S X 02 に伴って加工された S D 05 と S X 53 である。S K 04 も、この段階すでに加工されていた可能性がある。S X 53 が加工された段階では、3 区の岩盤は大きく加工されており、コの字形の広い空間が形成されていたと考えられる。この空間が形成されるまでには大規模な加工が伴うため、当初は石材を切り出す石切場であった可能性もある。S X 53 は、S X 54 が加工されたことによって、狭いテラス状に残されているが、その意図はよく分からない。

次に、S X 54・57 が加工される段階である。S X 56 も、これらと同時期の可能性がある。これらの平坦面が同時期のものであれば、この時期においても広い空間が存続していたかもしれない。S X 57 の面には S P 13 も掘り込まれていることから、この段階には簡易的な小屋が建てられていたと考えられる。少なくともこの時期には、S D 05 の一部が機能していたようで、S X 54 東端部は S D 05 の壁面を壊さないよう土手状に掘り残している。

岩盤の中央が崩落した後は、広い平坦面は加工されておらず、S X 55 や S X 59 などがわずかに加工される程度になる。S X 02 の南側の空間には、岩盤の上面を整地して、その上に S W 01 を築いて 2 段の平坦面を構築している。S W 01 西部には、岩盤との間に S X 53 と類似した幅 1 m 程度のテラス状の閉塞空間がある。このような空間を設けた意図や、その機能は不明である。しかし、岩盤も「L」字形に加工し、その形に合わせて石を並べていることから、意図をもって設けられていると考えられる。

#### 第3節 調査範囲南部の平坦面

1・4 トレンチでは、平坦地に建物が建っていたことが想定されている。

1 トレンチでは、第 2 面で検出された石 (S 04・05) と土間面が該当する。S 04・05 は、いずれも上面が平らになっており、石同士の距離が 2 m 弱 (約 6 尺 5 寸) と大森の建物で一般的な柱間寸法であることから、建物の礎石であった可能

性が高い。S 04 は S D 01 の積石を兼ねており、溝の他の積石と比べて南側に 30cm 程度長くなっている。この部分に柱をのせていたことが想定される。S D 01 と S 04・05 が直交していることから、S D 01 と平行して建物が建っていたと考えられる。この時期には S D 01 も、建物からの排水を流すための溝として機能していたと想定される。S D 01 に屋根からの雨水を流すことを考えると、切妻屋根の建物があったのではないかと想像される。なお、第 2 面よりも 1 段階古い、第 3 面の段階では、SW 04 から南側の一段低くなった箇所が平坦地として機能していたようであるが、調査範囲の制限もあり、具体的な利用状況は明らかとできなかった。

4 トレンチでは、上面が平らで、方形に加工された礎石状の石 (S 01 ~ 03) と、製錬遺構等が存在する可能性のある被熱した床面が確認された。この建物は、SW 02 と同時に機能していたとみられ、江戸時代後半における製錬の実態を解明する上での、貴重な資料となることが期待される。現段階では製錬炉は検出されず、建物の規模も明らかとできなかったため、次年度の課題としたい。

このように、1・4 トレンチのいずれにおいても、江戸時代後期に平坦地が整備されたことが明らかとなった。石見銀山におけるこれまでの発掘調査でも、18世紀後半に景観を大きく変えるような地形の変更が、多くの地点で確認できており、大谷においても同時期に規模の大きな整備がされた可能性が考えられる。

#### 第4節 調査

##### 第1項 調査地周辺の間歩の名称

本年度の調査範囲の周辺には、山吹城登山口付近に所在する甘南備坑をはじめとして、間歩が多く残っている。特に、調査地の東部に所在する 465 号間歩は、平成 10(1998) 年に島根県教育委員会が実施した間歩調査では、「小吹屋後山間歩」に比定されている。小吹屋後山間歩は、幕府直営の御直山の一つで、正徳 4(1714) 年と享保

14(1729) 年の間歩改には名前が記載されているが、文化 13(1816) 年には記載されていないことから、主に 18 世紀前半頃に稼業していた間歩と推察することができる。発掘調査でも、465 号間歩の南側には製錬施設があった可能性が高いことが確認されており、「小吹屋後山間歩」が正確な情報であれば、間歩の名称に現地の状況が反映されている興味深い事例となる。

しかし、藤田組が明治 23(1914) 年に測図した地図を、大正 6(1917) 年に写した図面では、この 465 号間歩の位置にある坑道が「岩屋堂坑」と記されている。先述した間歩改には、位置は不明ながら大谷の項に「岩屋堂間歩」の名前もあり、この岩屋堂坑と同じ間歩を指している可能性がある。ただし、この図面は、現在甘南備坑に比定されている場所に「二百枚坑」と別の名前があるほか、甘南備坑がかなり離れたところに記載されているなど、現状とは異なっている。そのため、作成時もしくは複写時に間違って記載されてしまった可能性もある。

現状では、いざれかに断定できるだけの資料がないため、引き続き調査を進めたい。

#### 第2項 次年度の課題

本年度の調査では、岩盤加工の展開や、平坦地の利用状況の一部が明らかとなり、大谷地区における土地利用の様相を把握することができた。一方で、4 トレンチで検出された製錬施設の有無及び実態については、調査範囲や期間の問題もあって十分に把握することができなかった。現状で確認されている面の下からも遺構が検出される可能性があるため、下層確認も含めて調査を進めたい。

また、調査地周辺における平坦地や岩盤加工遺構などの分布状況についても、引き続き調査が必要である。これらについては、次年度以降の課題としたい。

## 引用・参考文献

- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山道路総合調査報告書』
- 第1冊【遺跡の概要】
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山道路総合調査報告書』
- 第2冊【発掘調査・科学調査編】
- 鳥根県大田市 2006『史跡石見銀山道路保存管理計画書』
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 1999『石見銀山道路発掘調査報告書』 I
- 中田健一他 2005『石見銀山道路発掘調査報告書』 II 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 中田健一・新川隆 2013『石見銀山道路発掘調査報告書』 III 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 山手貴生・新川隆・尾村勝 2019『石見銀山道路発掘調査報告書』 IV 大田市教育委員会
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会 2000～2004『石見銀山道路発掘調査概要』 10～14
- 大田市教育委員会 2006～2020『石見銀山道路発掘調査概要』 15～27
- 新川隆 2019『陶磁器からみた鉱山町の変遷』『石見銀山道路テーマ別調査研究報告書』 4 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 江戸遺跡研究会 2001『図説江戸考古学研究事典』
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
- 大橋康二 1984『肥前陶磁の変遷と出土分布』『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋康二 1994『古伊万里の文様 初期肥前磁器を中心に』理工学社
- 小野正敏 1982『15～16世紀の染付碗、皿の分類と編年』『貿易陶磁研究』 No. 2
- 関西近世考古学研究会 2013『関西近世考古学研究 21 中世末から近世の地鎮め遺構の諸様相』
- 西尾克己 2013『石見銀山道路出土の在地系陶器・石見焼について（1）』『世界遺産石見銀山道路の調査研究』 3
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 西尾克己 2014『石見銀山道路出土の在地系陶器・石見焼について（2）』『世界遺産石見銀山道路の調査研究』 4
- 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 西田宏子・大橋康二監修 1988『古伊万里』別冊太陽 日本のこころ 63 平凡社
- 平田正典 1979『石見粗陶器史考—原点の模索と丸物師の生活史—』黒潮社
- 守岡正司・新川 隆 2011『陶磁器から見た石見銀山道路』『石見銀山道路テーマ別調査研究報告書』 I 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
- 森田勉 1982『14～16世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』 No. 2

# 図版





大谷地区 調査前状況（東より）



同 調査区設定状況（西より）



大谷地区 1区全景（南西より）



同 1区全景（西より）



大谷地区 1区東側（北東より）



同 1区西側（北東より）



同 1区西側（西より）



同 1区東端（東より）



同 1区東端硬化面（西より）



同 1区東端硬化面（南より）



同 1区SW02上面（北より）



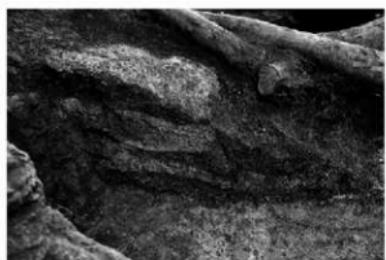
同 1区SW02上面（西より）



大谷地区 1区 SX68 (南より)



同 1区 SX68 (東より)



同 1区 西側土層断面 (西より)



同 1区 東側土層断面 (西より)



同 1区 南東側土層断面 (東より)



同 1区 東側炭化物層 (北より)



同 1区 SW02 裹込み土層断面 (東より)



同 1区 SW02 裹込み土層断面 (西より)



大谷地区 2区西半岩盤加工造構（南より）



同 2区西半完掘状況（東より）



同 2区西半完掘状況（西より）



大谷地区 2区SD03 (西より)



同 2区SD04 (西より)



同 2区SD03 (西より)



同 2区土層断面 (東より)



同 2区SD03土層断面 (東より)



同 2区SK03 (東より)



大谷地区 2区 SX01 (東より)



同 2区 SX01 (南より)



同 2区 SX01 (南西より)



同 2区 SK01 (東より)



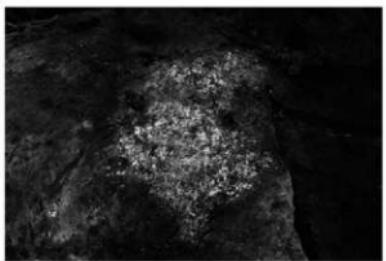
同 2区 SK01 (南より)



同 2区 SK01 土層断面 (東より)



同 2区 SK01 土層断面 (北より)



大谷地区 2区SKO 2検出状況（南より）



同 2区SKO 2完掘状況（南より）



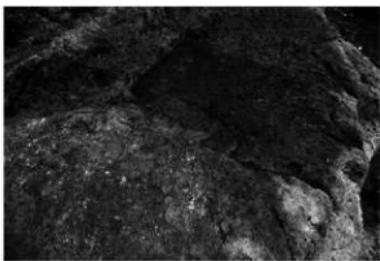
同 2区SKO 2土層断面（東より）



同 2区SKO 2土層断面（南より）



同 2区ユリカス層検出状況（東より）



同 2区ユリカス層検出状況（南西より）



同 2区ユリカス層土層断面（南より）



同 2区ユリカス層完掘（東より）



大谷地区 3区北側完掘（西より）



同 3区南側完掘（北西より）



大谷地区 3区SX02西側（東より）



同 3区SX02東側（南西より）



同 3T検出状況（北より）



同 3区SX52（南より）



大谷地区 3区 SX04・SW01 (南より)



同 3区 SW01 (北より)



同 3区 SW01 (南東より)



同 3区 SW01 (南西より)



同 3区 SK04 (西より)



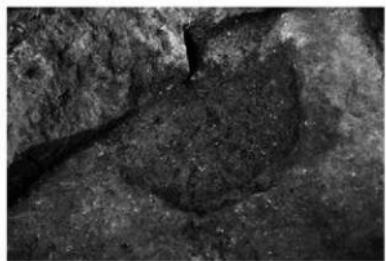
同 3区 SK04 (北より)



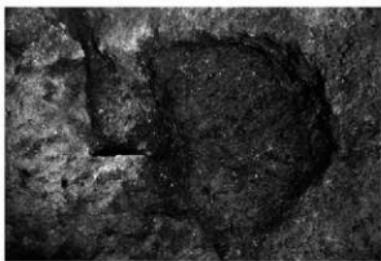
同 3区 SK05 (南より)



同 3区 SK05 (西より)



大谷地区 3区SK06 (南東より)



同 3区SK06 (南より)



同 3区調査風景 (西より)



同 3区SD06 (西より)



同 3区SD05西側 (東より)



同 3区SD05中央部 (南より)



同 3区SD05中央部 (南西より)



同 3区SD05東側 (西より)



大谷地区 1T全景（北西より）



同 1T第1面（北西より）



同 1T第2面（北西より）



大谷地区 1TSD01 完掘 (南西より)



同 1TSD01 完掘状況 (南西より)



同 1TSD01 土層断面 (南西より)



同 1TSD01 北壁石組 (南東より)



同 1TSD01 南壁石組 (北西より)



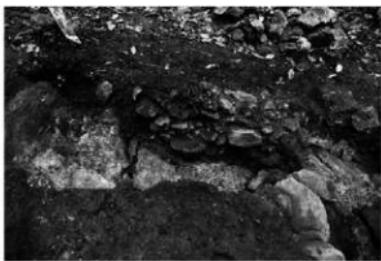
同 1TSW03 (南東より)



同 1TSW04 (北西より)



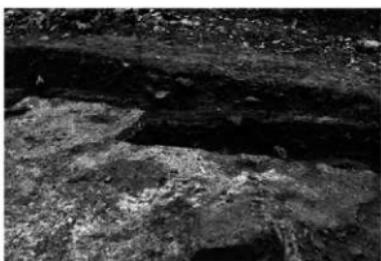
大谷地区 1T 土層断面（北西より）



同 1T 北端土層断面（南西より）



同 1T 北側土層断面（南西より）



同 1T 南東側土層断面（南西より）



同 1T 南端土層断面（西より）



大谷地区 4 T北側（南より）



同 4 T北側（西より）



大谷地区 4 T南側（北より）



同 4 T南側（東より）



大谷地区 4 T SWO 2 (南より)



同 4 T 北側土層断面 (北東より)



同 4 T 北端土層断面 (東より)



同 4 T 南側土層断面 (東より)



同 4 T 北側遺物出土状況 (東より)



大谷地区 5 T完掘状況（北西より）



同 5 T完掘状況（南東より）



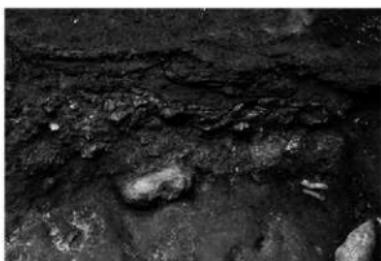
同 5 T完掘状況（南より）



同 5 T下段完掘状況（南東より）



同 5 T上段土層断面（南西より）



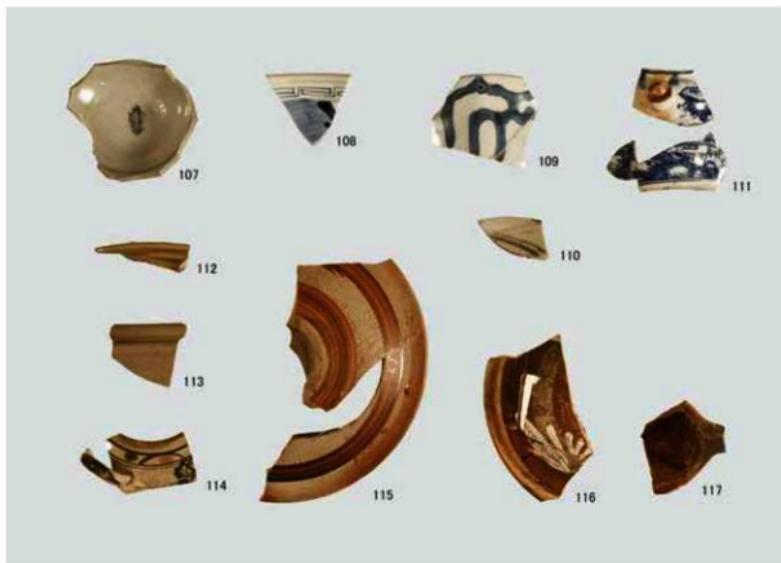
同 5 T硬化面検出状況（南東より）



大谷地区第1地点出土遺物 I



大谷地区第1地点出土遺物Ⅱ



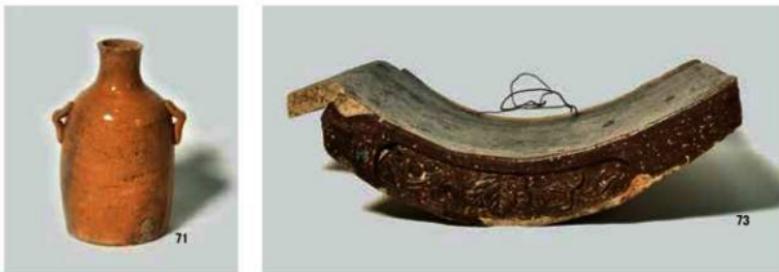
大谷地区第1地点出土遺物三



大谷地区第1地点出土遗物IV



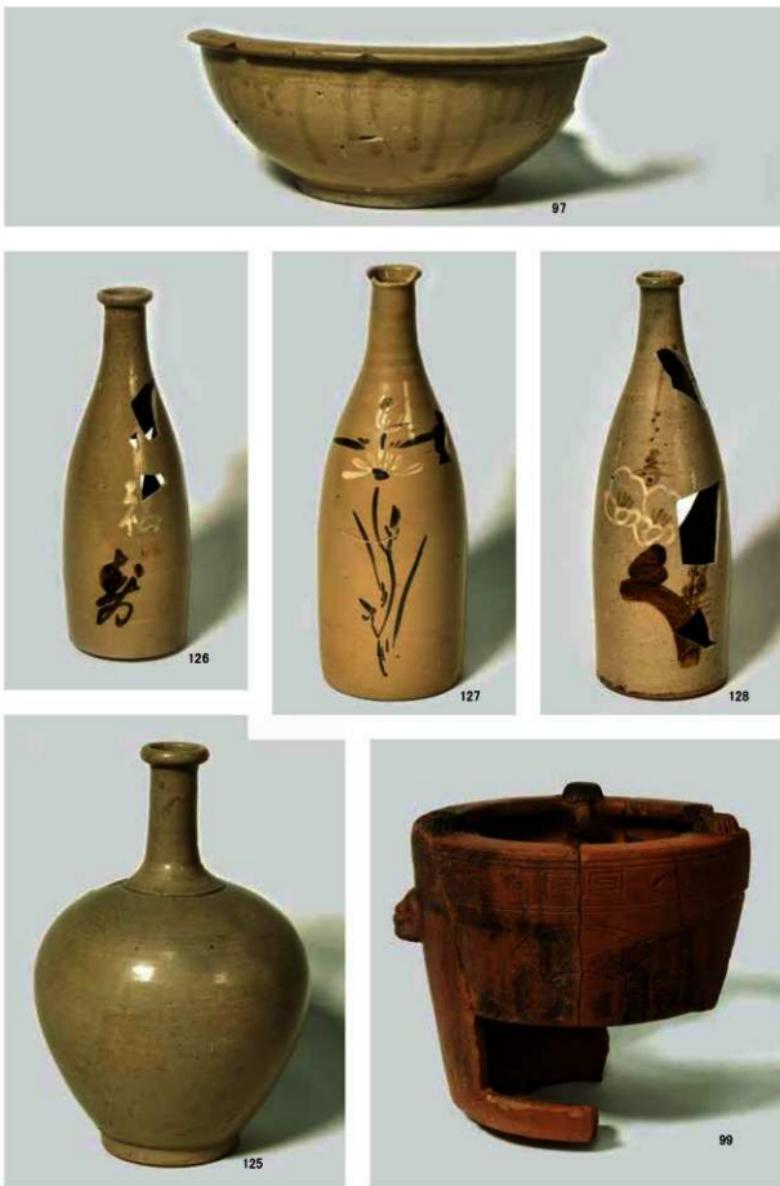
大谷地区第1地点出土遺物V



大谷地区第1地点出土遗物VI



大谷地区第1地点出土遺物Ⅲ



大谷地区第1地点出土遺物図



## 報告書抄録

ふりがな	いわみぎんざん					
書名	石見銀山 Iwami-Ginzan Silver Mine Site					
ふりがな	いわみぎんざんいせきはっくつちょううさかいよう					
副書名	石見銀山遺跡発掘調査概要 28					
シリーズ名・巻次	大谷地区					
編著者名	山手貴生・新川 隆・尾村 勝					
編集機関	島根県大田市教育委員会					
所在地	〒694-0064 島根県大田市大田町大田口 1,111					
発行年月日	2021年3月31日					
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査年月日
		市町村	遺跡番号			
石見銀山	しまねけんおおだしおおむらちょう 島根県大田市大森町	32205	A232 ～ 319	35° 5' 30"	132° 26' 30"	2020年8月 ～ 2021年1月
調査面積	164m <sup>2</sup>					
調査原因	国庫補助事業による学術調査					
所収遺跡名	各種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
石見銀山	鉱山遺跡	戦国時代 江戸時代 明治時代	土石 石垣 石溝 石列 跡 岩盤加工	陶磁器 金属製品 石製品	国指定史跡 銀生産遺跡 (1969年4月14日) (2002年3月19日、 2005年3月2日、 2005年3月14日、 2008年3月28日 追加指定)	

**石見銀山**  
Iwami-Ginzan Silver Mine Site  
**石見銀山遺跡発掘調査概要 28**



— 大谷地区 —

2021年3月

島根県大田市教育委員会  
島根県大田市大田町大田口 1,111 番地  
印刷・製本 柏村印刷株式会社